

会報
第84号



一般社団法人 函館文化会

〒042-0955 函館市高丘町51番1号
学校法人野又学園 函館大学内
電話・FAX (0138) 57-1175
E-mail bunkakai@host.or.jp
URL http://hakodate-bunkakai.com/

令和4年度定時総会を開催 ～新会長に平原康宏氏を選任～

一般社団法人函館文化会では、令和4年度定時総会を5月27日(金)午後1時30分からフォーポイントバイシェラトン函館において、会員総数148名の内121名(委任状出席を含む)が出席し開催しました。

今年度の定時総会は、新型コロナウイルス感染症予防対策を施し、参加会員の協力で効率的な運営に努め、提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承、また、任期満了に伴う新役員は議長の指名により選任に同意、無事終了しました。また、総会終了後にはコロナ禍で中止となっていました「卓話」を3年振りに開催することが出来ました。(「卓話」の概要は、15ページ参照)

以下、定時総会の内容について、その概要をお知らせします。

定時総会は、金山正智会長から「コロナ禍で活動にも制約が出ているが、そんな中で創意工夫を交えながら取り組んできた。新年度も皆さんの知恵をお借りしながら、一つ一つ課題を解決しながら進めていきたい」との挨拶の後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。

今定時総会に付議された議案・報告は

- 議案第1 令和3年度事業報告について
- 議案第2 令和3年度収支決算及び監査報告について
- 議案第3 役員(理事、監事)の選任について

(ノ次ページに)



函館文化会 会報「巴響」 第84号 目次

令和4年度定時総会を開催 ～新会長に平原康宏氏を選任～	1	西部地区～少年時代の思い出	宮脇 寛生	22
会長就任にあたって	平原 康宏	元町、先住民思い出ポロポロ～	太田 誠一	23
退任ご挨拶	金山 正智	弥生小学校旧校舎の思い出	藤井 良江	25
函館文化会役員名簿(令和4年度定時総会選任)	3	西部地区の歴史資料に感謝とリスペクト	仙石 智義	26
函館文化会講演会		新しく変わろうとしている西部地区	和田 一明	28
令和3年度講演会・講演録		西部地区の原点回帰	根本 直樹	29
北洋漁業と函館		西部地区の魅力を俳句とポスターで		
元(株)ニチロ取締役東京支社長 加藤 清郎	4	函館西高校、公立はこだて未来大学		31
令和4年度講演会開催案内	7	特別寄稿		
市民公開講座		函館でコアップガラナが出来るまで	小原 幸雄	32
第8回 西部地区の魅力に惹かれて		野鳥の世界に魅せられて	西沢 勝郎	33
ギャラリー村岡代表 村岡 武司	8	原稿募集!! 函館の歴史と文化を語り継ぐ		
坐禅の魅力と作法		次回テーマは「亀田」		37
国華山高龍寺 住職 永井 正人	11	第8回市民公開講座 国華山・高龍寺で開催		37
第9回 市電のルーツ・函館馬車鉄道ものがたり		函館文化会への図書等の寄贈		38
グレイスマodel代表 増井 慎吾	12	函館文化会「ホームページ」「ブログ」開設しています		38
卓話		函館文化会 会員募集及び助成制度		38
創作紙芝居「初代わたなべ熊四郎物語」		会務報告		
(合資)水引アート工房清雅舎代表 今泉 香織	15	令和3年度事業報告		39
特集 函館の歴史・文化を語り継ぐ⑦		令和3年度収支決算		41
～テーマ「西部地区」～		函館文化会会員名簿(R4.10.01現在)		42
大三坂の洋館	小熊 庸介	編集後記		42
生まれも育ちも西部地区	山那 順一			

- 報告第1 令和3年度収支補正予算について
- 報告第2 令和4年度事業計画について
- 報告第3 令和4年度収支予算について
- 報告第4 「講演会」の開催について

の7件で、議案第1、議案第2及び報告第1は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から5月19日実施した監査について「経理については正確かつ適正に行われており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていると認める」との監査結果の報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された令和3年度事業報告・収支決算については、別掲（39ページ）のとおりです。

また、去る3月25日の令和3年度第3回理事会で議決した令和4年度事業計画・収支予算について、報告第2及び報告第3として一括説明がありいずれも満場一致で了承されました。

新年度の事業の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には多くの会員に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、また、「函館文化会講演会」は、10月15日（土）函館市中央図書館で、気象庁函館地方気象台長 橋本 勲氏を講師に迎え「函館の気象150年」を演題に開催予定、年2回開催の「市民公開講座」も郷土の歴史・文化に関する色々なジャンルの方々を講師に迎え、継続して実施することが報告されました。

次に、議案第3の役員を選任について、現役員が今定時総会をもって任期満了となることから、議長から指名された理事、監事候補者を順次諮りいずれも満場一致で選任に同意。新役員選任後、総会終了後の理事会において会長等の互選が行われ、会長に平原康宏理事を選任、以下新役員が別掲（3ページ）のとおり決定いたしました。

就任挨拶



会長就任にあたって

一般社団法人 函館文化会 会長 平原 康宏

このたび金山正智前会長の後任として伝統ある函館文化会会長に就任し、身の引き締まる思いで一杯であります。

函館文化会は、昨年創立140周年を迎えましたが、コロナ禍で特に記念となるような事業は出来ませんでした。そうした中ではありましたが、「会報に見る函館文化会“この10年”」を発行し、創立130周年以降の活動を振り返ることが出来ました。これまでの事業や活動の礎をもとに函館の文化活動の応援団としての取り組みを続けていきたいと考えております。その先頭に立って、微力ではございますが、精一杯業務に取り組んでまいりますので、皆様方のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

さて、話は少し古くなりますが、仕事の関係でカール・レイモンさんのご自宅にお邪魔する機会があり、いろいろお話しをお伺いすることができました。

そのあと家の外に誘われ、大三坂から見上げて「見てごらん!!日本のお寺や各派の教会があるでしょう。この狭いエリアに世界の宗教が集まっている。この風景は世界の中でどこにも無い風景ですよ。平和の象徴だね。函館は平和で素敵な街だね」というお話しを何回もお聞きしました。

あらためて思い返しますと、この場所は異国情緒にあふれ観光都市函館の顔と言っても過言ではありません。

「誰かに住む街聞かれたら はい函館と答えます♪～」

函館大好き人間の私はますます函館のことを好きになり、もっと深掘りしたくなってきました。好きになればなるほどもっと知りたくなるのは人間の本能なんだろうなと思います。

最近では日々是勉強との思いから、この2～3年函館のまちづくりの講演会に参加させていただいております。皆様ご存じのとおりコロナ感染症が一旦は収まりかけたかに見えましたが、最近になり再拡大の兆しが見え不安が広がっております。

早く収束されますよう祈念したいものです。

退任挨拶



退任ご挨拶

一般社団法人 函館文化会 前会長 **金山正智**

前会長安島 進氏の後任として、平成28年春、歴史ある函館文化会会長の任に就かせていただきました。以来6年間、会員の皆様方には大変なご支援、お力添えを賜りました。誠にありがとうございました。

函館文化会は、更なる活動の充実を求めて、前会長の時代から種々内部で検討が進められておりましたが、その中心課題は『講演活動の多様化』でありました。平成28年、この年から新たな事業「市民公開講座」が始まります。しかも年2回の開催ということで、これまでの「文化会講演会」「卓話」に加え、当会の講演活動は一挙に多彩なものとなりました。市民公開講座のテーマは第1回の「函館弁」から「北の食文化」「洞爺丸事故」「箱館・洋楽」と続き、函館のいろいろな顔、歴史に触れる幅広いものとなりました。会場としては講座テーマにゆかりのある場所として競馬場、各社寺・教会などが選ばれ、普段出入りがかなわない場所での講演や施設などの見学は臨場感も増して、参加者に好評でありました。

また、『会員相互の交流充実』は文化会の常なる課題であります。平成28年には「神山茂賞」贈呈式を会員に広く参加を呼びかける形で開催しました。式後の祝賀会は、会員相互の交流の中で祝意を交わす心楽しい会となりました。

また、「会報」に郷土の様々な思い出に関わる会員寄稿の欄が、毎号設けられました。会員の顔が見える会報として、誌面に厚みと温かみが出たこともうれしいことでした。

こうした新しい事業展開により事務局の仕事は急増しますが、これを助けたのが「企画委員会」です。各講演会や市民公開講座、卓話の企画、運営に直接かかわり大きな力を発揮していただきました。ありがたいことでありました。

思い起こすことを書き連ねました。改めて、在任中、皆様から賜りましたご支援・ご協力にお礼を申し上げ、退任のご挨拶といたします。

一般社団法人 函館文化会 役員名簿

(令和4年5月27日選任)

○会 長	平原 康 宏 (新)	○理 事	佐々木 茂	○理 事	山本 真 也
○副 会 長	繪 面 和 子 (新)		佐 藤 育 子 (新)		若 山 直
	櫻 井 健 治 (新)		須 藤 由 司 (新)	○監 事	佐々木 俊 克 (新)
○常務理事	上 田 昌 昭		中 野 晋 (新)		山 田 涼 子
○理 事	五百川 忠		藤 井 方 雄	○顧 問	池 見 厚 一
	小笠原 孝		藤 井 良 江		金 山 正 智 (新)

この度の役員改選で、小原幸男氏、金山正智氏、平昭世氏、向出清治氏が退任されました。永年のご尽力に感謝申し上げます。なお、金山氏はこれまで会長としてその職責を果たされましたが、引き続き「顧問」に就任しました。

令和3年度 函館文化会講演会

『北洋漁業と函館』を演題に開催しました

函館文化会では、令和3年10月16日(土)函館市中央図書館視聴覚ホールにおいて「函館文化会講演会」を開催しました。本講演会は、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年行っているもので、この度は元(株)ニチロ取締役東京支社長の加藤清郎氏を講師にお招きして「北洋漁業と函館～日魯漁業創業者 堤清六氏没後90年にあたって～」と題しての講演で、新型コロナウイルスの非常事態宣言が解除後での開催となり、入場者数を定員の半分程度に設定するなどの感染防止対策を図るなどしての開催でしたが、多くの会員、市民の皆さんに参加いただき盛況裡に終了いたしました。



加藤氏は、戦前・戦後の昭和年代を通じて函館の地域経済を支える基幹産業であった北洋漁業の礎を築いた日魯漁業創業者堤清六や彼を支えた函館出身の平塚常次郎との出会いの話を「北洋の名勝負」というタイトルのビデオ映像や地図などを使い、エピソード、裏話などを交えて解説いただきました。

日魯漁業はブロンゲ岬での堤清六と平塚常次郎の出会いにより新潟に堤商会を設立し、帆船「宝寿丸」に乗ってカムチャツカに向かい漁場の開拓を進めたことから始まり、戦前の昭和期では、北洋漁業の漁場もカムチャツカ半島やロシア沿岸、占守島などの千島列島へも拡大したが、ロシアのデンビー商会との対立があり、日本海軍の護衛を受ながらの操業もあった。

また、戦後の昭和期、昭和27年に北洋漁業が再開されたものの、その後、200海里問題などから昭和63年で北洋サケ・マス母船式操業が終了したが、「あけぼのサケ缶詰」が誕生110年を迎えた今も販売されており、北洋漁業時代からの伝統が引き継がれていることを話されていた。

加藤氏は、父方が堤清六と母方が平塚常次郎とそれぞれの血筋に当たられることもあり、函館の街を支えてきた北洋漁業と函館の関わりについての熱意のこもった話しに聴講された皆さんは吸い込まれるように聞き入っていました。

なお、今回の講演内容について、講師の加藤氏に要約していただきました。今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければと存じます。

令和3年度講演会(令和3年10月16日)・函館市中央図書館

北 洋 漁 業 と 函 館

～日魯漁業創業者 堤 清六氏没後90年にあたって～

元(株)ニチロ取締役東京支社長 加 藤 清 郎



只今紹介いただいた加藤です。この度、函館文化会様から、日魯の創業者である堤清六の没後90年ということで「北洋漁業と函館」というタイトルでの講演をお願いしたいという大変貴重な機会をいただき、堤清六、平塚常次郎の末裔の一員として大変嬉しく思い厚くお礼申し上げます。

今回の講演に入る前にどのように調べたかですが、調べたものは日魯漁業経営史(第1巻、第2巻)、昭和33年(1958)、私が会社に入った年ですが、日本経済新聞

3月版に「平塚常次郎 私の履歴書」が掲載され、これらの資料三点を中心にまとめ資料として皆様にお渡しした。今の世の中はネットなどで色々調べることができるが、事実の一つ、私としては肉親という立場で、見聞きした裏話的なものも含めながら話しを進めていきます。

一北洋とその開拓一

はじめに、北洋がどういうものかということを手短かに話すと、北洋はとてども広く、一般的にはベーリング海、オホーツク海周辺の太平洋に面した区域になる。日本に来る台風は大体太平洋に抜けて消滅するが、なかには太平洋で勢力を盛り返してカムチャツカに向かうものもあり、このため台風の終着地として恐れられ、ロシア人も天から見放された土地・墓場として恐れたと聞いています。こうした中、千島開拓の志を立て、露領領土開拓の祖となった人物が、資料にある郡司成忠大尉です。堤清六、平塚常次郎の大先輩にあたる郡司大尉は、明治8年(1875)「樺太・千島交換条約」で占守島までの主要17島が日本領になったことにより、海軍大尉の地位を退いて予備役となり、民間人として千島で拓殖事業を起そうと母体となる「報効義会^{ほうこうぎかい}」を組織し、明治26年(1893)3月千島を目指し、東京港を出航した。しかし、このときは青森沖で暴風に遭い、函館に戻った。その後、改めて択捉島へ渡り、続いて当初の目的地である占守島に向けて進み、合計165日を費やして漸く目的地に到着し、開拓を行った。そして、この地域でサケ・マス・タラ・カレイ等の資源が豊富なことを発見し、さらに、カムチャツカ半島も調べ、サケ・マス・カニの素晴らしい漁場であることを報告している。こうした漁場の状況や海外では紅サケ缶詰の需要が多いことを郡司大尉から助言を受けていた堤と平塚は、彼の訃報に接したときその死を悼み「今や露領漁業は順調に発展を遂げ、氏の遺業は後世に継がれることでありましょう。」との趣旨の弔辞を連名で捧げた。

因みに、郡司成忠氏は、文豪 幸田露伴、史学者 幸田成友、音楽家 幸田延の兄にあたります。

毎年5月になると函館からカムチャツカ、アリューシャンに向けて船団が出港して行きますが、昭和31年に出港したときが最高で16船団にのぼり、うち日魯は6船団が集結し、船員達も北海道はもとより東北、北陸などの日本海側を中心に基地の函館に集まってきた。そしてサケやマスなどの資源を求めて出港し、一番綺麗な海域で育ったサケを船団が獲って缶詰にしたり塩引きにしたりした。いわゆる工船のものが一番美味しかった。昭和

7年(1932)のカムチャツカの地図では川が一杯あり、サケやカニの缶詰工場などが示されている。川に上る前のサケを獲って缶詰を作る。そうしたことは当時としては当たり前のもので、ビデオ映像では養女の平塚千鶴子さんが北洋に出て行った堤、平塚から聞いていることを思いだしながら話されているので、まずは映像をご覧ください。

一ビデオ映像「北洋の名勝負」上映一

一ブロンゲ岬の出会い一

ブロンゲ岬の出会いというのは日魯マンにとっては、忘れられない話です。新潟県三条町出身の堤清六と函館出身の平塚常次郎が初めて出会ったのは、日露戦争で日本が勝利し、ポーツマス条約が結ばれて1年後の明治39年(1906)夏、露領沿海州アムール川河畔、間宮海峡に突き出たブロンゲ岬でした。二人の青年は、豊富なサケ・マス資源がある、つまりカムチャツカは獲っても獲ってもサケが海から湧いてくるような土地で、二人はその将来性を語り合ううちに意気投合し、帰国後の再会を約して別れた。新潟に戻った堤は、1万2,500円の資金を同族から集め、新潟市に堤商會を設立。6,550円を投じて西洋式帆船宝寿丸を入手し、明治40年(1907)6月新潟・信濃川河口をカムチャツカに向けて出港。函館で物資を積み込みながら北上し、一ヶ月余りの航海の末に、カムチャツカ半島東岸ウス・カムに到着した。ときに堤清六27歳、平塚常次郎26歳であった。

一ウス・カム工場とオゼルナヤ缶詰工場一

明治43年(1910)、東カムチャツカのウス・カム漁場の工場内で704函の紅サケ缶詰を生産した。サケの切り身を詰めたブリキ缶を煮沸し、半田ごてで一つ一つ蓋をしていく手作業だった。大正2年(1913)、より紅サケが獲れる場所を求めて、西カムチャツカオゼルナヤ漁区内の工場に当時では最高水準とされたアメリカA.C.C.社の機械を導入するため社員をアメリカに送り込み「金はいくら掛かっても良い、立派なものを買ってこい。」と伝え、新しい機械の導入に成功し、量産体制を整えて生産高を上げていった。今までは獲ってきた魚を仕分けてカットし、一つずつ缶詰に詰めるという作業だったが、新しい工場では空缶を作る所、一方では魚を仕分ける所と云うことで、人の手に一切触れない状態で缶詰を量産していった。この新工場で生産された紅サケ缶詰のイギリス輸出用には「DAY BREAK BRAND」が使用され、北洋における最優秀品として他を大きく引き離し、更に同年

から採用された「あけぼの印」の赤・白・黄三色の商標とともに堤商会の名を世界に広めていった。また、大正3年（1914）に第一次世界大戦が勃発すると戦時食糧と云うことで、北洋の缶詰も飛ぶように売れていった。次に、堤商会は海外宣伝の第一歩として大正4年（1915）秋にサンフランシスコで行われたパナマ太平洋万国博覧会にベニ缶詰を出品し名誉大賞牌を受賞した。漁期が終わって空缶を製造出来るのに機械を遊ばせておくのは勿体ないと云うことから製缶の機械を函館に送り、缶製造を始めたが、火事によりその機能をカムチャツカに一番近い小樽に持っていったのが北海製罐の始まりです。また、大正10年（1921）頃には、輸出物ベニ缶の他に国内販売用のピンク缶の製造も始まり、この体制は昭和20年の終戦により北洋の全ての工場を失うまで続いた。

一企業合同による日魯漁業（株）の発足一

明治40年（1907）に堤商会を設立し、僅か6年後の大正2年（1913）にはサケ缶詰の生産拠点をカムチャツカ半島西海岸のオゼルナヤに移し、最新式の缶詰生産機械を導入して生産体制を整えてきたが、大正6年（1905）に勃発したロシア革命は、極東地域にも波及し、この後約10年間にわたって混乱が続いた。こうした中で堤は、会社の体制を時代に合わせて変化させていき、大正10年（1921）に、堤商会を合併した輸出食品（株）と勘察加漁業（株）、旧日魯漁業（株）の3社の大合同を行い、新たに日魯漁業（株）を設立した。新会社は、露領漁業の約7割のシェアを占めることとなった。堤は実質的に全権を握っていたが、新会社では表に出ないで会長となり、腹心の平塚を常務として会社の実務を任せた。堤は“名を捨て実を取る”形で企業合同を行い、現在に続く会社の礎を築いた。ここが堤の腹の据わったところではないだろうか。日魯漁業（株）が最高に儲かった時期というのは、昭和3年（1928）頃から4～5年位で、平塚は「儲かったら自分達で貯めないで、世の中に還元しろ」と云っていた。実際に株主への配当が3割、社員に渡すボーナスが10ヶ月ということもあり、皆に配って気持ち良く働いて貰うというのが考えで、そして会社を大きくしろと云っていた。ビデオの中でも話しが出ていたが「嫁にやるなら日魯の社員」と云われた。そうした中、堤は昭和6年（1931）に急逝した。

一戦後の日魯一

太平洋戦争の終結により、日魯は40年かけて開拓した漁場を全て無くした。しかし、平塚常次郎は北洋漁業再開に向けて大型母船購入を考え、このためには莫大な資

金を必要とした。これには金融関係を含めて慎重論が強かったが、社内での「万一失敗しても、サケで生まれた会社がサケで潰れるのは本望」という強い声に押され、平塚は自らときの一万田日銀総裁に会って大幅な融資についての協力を要請する一方、平塚の力を背景に急速な融資の実現を計った。これにより、昭和27年（1952）に明晴丸（5603t）を購入し、缶詰設備、冷凍設備を持つ高性能の母船に仕立て上げた。結果、サケ・マス缶詰3万8千函を製造し、全量を三菱を通じて英国商社に販売し、その後の北洋漁業の大型工船化に明るい見通しをもたらした。



早春の函館港から一斉に北洋の漁場に向かう独航船

昭和27年（1952）母船式サケ・マス漁業が再開され、昭和29年（1954）函館市は北洋再開による街の活性化を図るため全市を挙げた北洋大博覧会を開催した。北洋漁業が函館の経済に与えた影響は計り知れず、出漁の時期が迫ると高揚感が高まり、街は活気づきピーク時の経済効果、所謂北洋景気は70億円ともいわれ函館の復興を支えた。平塚は昭和49年（1974）に鬼籍に入り、昭和63年で母船式サケ・マス漁業は最後となった。

平成22年（2010）に“あけぼの印サケ缶詰”誕生100年を記念して復刻版が製作された。缶詰のラベルは100年前から受け継がれてきたもので、平塚千鶴子さんも外側のレタテルを変えようとする「元通りが良い、変えると分かりづらい」と話していたのを聞いていた。100年を経過する日魯の缶詰デザインは他に類を見ない。

一日露戦争勃発と信濃丸一

もう一つ、日魯マンが忘れてならないのが信濃丸という船です。信濃丸は明治33年（1900）に英国で竣工し、日本郵船が横浜とシアトル間の定期航路に使った貨客船

で、司馬遼太郎は、その著作「坂の上の雲」の中で、「日本船舶史上、信濃丸ほど良く働いた船はなかった。」と書いている。信濃丸は日露戦争で、海軍に仮装巡洋艦として整備、徴用され、バルチック艦隊の動向を探るため対馬海峡を哨戒中に遠くに煙を見て艦隊を発見し、有名な「敵艦見ユ」の電波を発信して、日本海海戦を勝利に導いた。その後、信濃丸は昭和6年（1931）に日魯漁業所属となり北洋のサケ・マス漁業の母船として仕事をし、太平洋戦争の敗戦とともに復員船として活躍したが、昭和26年（1951）解体されスクラップとなった。その後、母船式サケ・マス漁業が再開されると、生産体制増強のため昭和31年（1956）、イスラエル国籍の貨物船を購入し、サケ・マス缶詰工船に改造し、由緒ある船名「信濃丸」を復活させ、以降、総船団長が乗船する本部船を信濃丸と命名した。

結びに、昭和24年（1949）に日魯（株）から七飯町の木村捷司画伯のもとに持ち込まれた一葉の白黒写真（宝

寿丸を背景に堤・平塚を中心とした仲間達）をもとに、画伯が油彩キャンバスに人物の表情の豊かさを鮮やかな色彩で蘇らせた絵画を展示させていただきました。



木村捷司画伯作「宝寿丸と仲間達」

以上で私の講演を終了します。ご静聴に感謝いたします。

令和4年度 函館文化会「講演会」を開催します

今年度も函館市中央図書館との共催で「函館文化会講演会」を次のとおり開催します。

今回は、講師に気象庁 函館地方気象台長 橋本 勲氏をお迎えし「日本最初の気象観測所・函館」～気象台150年の歴史とこれから～と題しての講演です。

明治5年（1872）に開拓使函館支庁の福士成豊が、元治元年（1864）から明治4年（1871）までの8年間、降雪日数の観測や慶応4年（1868）からは気圧や気温の観測を行っていたブラキストンの観測を引き継ぎ、船場町（現在の函館市末広町）にあった自宅に観測機器を設置して、これを「函館気候測量所」とし、明治5年から観測を開始し、これが我が国の気象観測所における気象観測の始まりです。

こうした、日本初の観測を行った理由や現在の様々な異常気象に関することなどをお話ししていただきます。コロナ禍の中で若干ご不便をお掛けすることもあろうかと思いますが、感染防止に万全を期しますので、会員皆さんはもとよりお近くの方にもお声がけいただき、聴講くださいますようお願いいたします。

- 開催日時 令和4年10月15日（土）
午後1時30分開演（午後1時開場）
- 会場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
（函館市五稜郭町26-1）
※事前の申込不要です。直接会場にお越し下さい。なお、新型コロナウイルス感染防止のため聴講定員を75名とさせていただきます。なお、マスク着用をお願いします。
- 演題 「日本最初の気象観測所・函館」
～気象台150年の歴史とこれから～
- 講師 気象庁 函館地方気象台長 橋本 勲氏



函館文化会 市民公開講座

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探求しながら、受け継がれてきた「郷土の歴史・文化」を後世に継承することを目的に「市民公開講座」を開講しています。

今年は、3月と8月に2回の講座を開催しました。講師に、村岡武司氏と増井慎吾氏を迎え、会場は、曹洞宗国華山高龍寺様、学校法人野又学園函館大学様のご協力を得、いずれも想定した人数を超える会員・市民の方に参加をいただき、お二人の講師の興味深い話しに受講された皆さんから好評を博しておりました。特に高龍寺様においては講座開会前に永井正人住職による「椅子坐禅」の魅力と作法を学び体験し、また、講座の後、登録有形文化財となっている本堂や開山堂、山門など境内を案内していただきました（37ページ参照）

なお、2回の市民公開講座の内容について、講演録で概要をまとめましたのでご紹介します。

第8回市民公開講座（令和4年3月25日・曹洞宗 国華山高龍寺）

「西部地区の魅力に惹かれて」～元町からみえたもの～



～ プロローグ ～

昭和18年（1943）に音更町で生まれました。十勝平野のほぼ真ん中の広大な畑作地帯で、当時の労力は全て馬の力が頼りでした。農家には必ず馬が1、2頭いたもので、馬から出る排泄物もまた畑に戻し、それが肥料となって作物が育つという馬力循環型です。思えば人馬一体の神話のような時代でした。

子供の頃から魚釣りが好きで、粗末な竹の一本竿に馬糞ミミズを付けて音更川に出向くのです。釣りも終わって帰る途中、枯れ木に巻きついて沢山の実を付けたツルウメモドキを見つけ、持ち帰れば母親が喜ぶと夢中で引き摺り下ろしていると突然背後から声が掛かり「これこれ、それは私達の大切な神様だよ！」と言うのです。振り返ると口の周辺に刺青したアイヌの姥が一人佇んでいます。

話は少し逸れるが、小学1年のとき家に初めて電気が入りました。それ迄はランプの生活で、それが当たり前で、不自由も無かったし、周囲のどの家も皆そうでした。

ギャラリー村岡代表 村岡 武 司

愈々当日、裸電球のスイッチが入りました。今も鮮明に思い出しますが、「見えなくても困らなかったものが、見えるようになった」だけのような気がしますが、暗い部屋の隅々にまで一気に文明が届いたわけです。

それから日常は一変しました。ラジオが来て、洗濯機や冷蔵庫が来て、テレビが来る、三菱や東芝や日立が溢れ、音更川や十勝川の上流には大きなダムが出来、そんな時代にアイヌのお婆さんとその神さまに出会ったわけです。

その後高校を卒業して大学に行った。馬と神様の音更町から高度成長の東京へ行ったのです。東京オリンピックがあって進歩、成長、発展に舵を切り、江戸や明治が消えて高速道路が出来、地下鉄が延びました。百貨店などもどんどん大きくなった。変化は東京から地方に及び、帰郷するたび十勝や音更も微妙に変わって行きます。そしてそれらに出会う度に小さな不安を感じました。

～ 函館に感じたこと、惹かれたこと ～

初めて函館に途中下車しました。駅前の伯父宅に挨拶に行くよう云われていたのです。北洋漁業などで大変景気がいい時代でした。子供のいない伯父夫婦から小遣いを貰い2、3泊勧められ、昼間でしたが、ロープウェイで昇って、降りてきて、やがてヨハネ教会の近くから不思議な街区に紛れ込みました。現在も殆ど変わっていないように思うが、とても静かでした。古びてるが不思議なデザインの建物が立ち並んで、道ゆく人々もとても穏やかで、誇らしげで豊かそうでした。音更ではなく東京で

もない佇まいは、違う時代や遠い異国を感じさせました。結局、大学卒業して函館にきました。伯父宅に居候し仕事を手伝いながら、休みごとに西部地区に来てました。

話は別ですが、大阪のT姉妹をご紹介します。お二人も函館が大好きで、5、60回は来てると言い、西部地区をうろうろ歩き一泊か二泊して大阪へ帰るのです。「飛行機が函館空港に着陸し、扉が開くと函館の空気が入ってきて、その空気に触れた細胞の一つ一つがウレシイウレシイと喜び出すのが分かるんです！と云うのです。彼女達の表現、とてもよく理解できます。私もそう思ったもので、何かよく分からない何かに招かれて、良く来たなどと語りかけられた気がします。

～ ユニオンスクエアと市民活動 ～

豊川町の旧郵便局舎（昭和36年まで現役だった函館中央郵便局舎）の再生計画に参加しました。レンガ造2階建てで、本局が新川町に移転してから長期間放置されてました。前後の見境なく直感で参加を決めました。思えばその為に函館に来た気がしたのです。

建物は酷い状態でした。窓ガラスが割れてハトが入りし、床はハトの糞だらけ、2階の廊下には大きな穴があき直下一階部分が覗けました。まさに廃墟でした。それでも再び多くの人々が集まる予感がありました。往時の郵便局は通信手段の唯一最大の集積地であり、膨大な電信電話や葉書や手紙が行き来したのです。多くの人の記憶が刻まれた建物は、再び多くの人々を呼び寄せるのです。



旧函館郵便局（現在、はこだて明治館）

一階の入口近くに“かもめの水兵さん”という工芸品店を開き、二階に分不相応な倉庫兼事務所を持ちました。しかし運営主体が一年ほどで経済事故を起こし、新聞でも”それ見たことか文化人商法”と揶揄されました。大変なことになったが、ここで開き直った。廃墟が生き返り、人々が入りし、商品を仕入れ、電気代を払い、人を雇うのこそが社会生活です。すぐにユニオンクラブというテナント会を組織し営業活動を続けました。仲間たちは頑張りました。照明器具専門店や布地専門店、ジャ

ンクショップや宝石店や、美容室、ピアノ教室、バレエ教室、建築設計事務所の努力で、少しずつ来館者が増えで行きます。

そんなある日、大手の広告代理店から連絡がありました。話を聞きたいとの事で、東京日比谷公園のレストランへ出向き、東京建築探偵団の藤森照信氏と日本ナショナルトラストの米山淳一氏が同席し、歴史的建築物の話題で盛り上がりました。広告代理店はその機関紙で、二度の特集を組みました。町並み観光の嚆矢といった風な内容でした。

藤森さんは建築史学の権威で、ヨーロッパの下見板貼りの建築技法が世界各地へと伝わったのはキリスト教三派の拡大と機を一にしての事、と解説してくれました。その三派ですが、ザビエル率いるカトリックはインド洋経由長崎上陸、北上して函館元町到着。東方正教はニコライ師のシベリア経由で一気に函館元町に到着。英国国教会はメイフラワー号のアメリカ経由で、結局ペリー黒船艦隊は東洋の君主国をこじ開けて函館元町に辿り着く（ただし、ペリー艦隊はインド洋経由）。こうして、ローマで三つに分かれたキリスト教が、大砲備えた大船で地球を半周し、北海道函館元町で再会します（私の一部脚色入）。

私も元町に住みたかった。不動産業の知人は「何代にもわたる住人が多い元町には、出物は殆ど無いんだわ」と言います。しかし物件が出たとの事で見に行ったら、何と、あの時、函館山から降りて辿り着き感動したあの場所だったのです。安値とは言い難かったが、直感も閃き即決しました。

札幌雪まつりには多くの観光客がやってくる。そこで「函館元町に冬のまつりをつくる会」を結成した。市民に呼びかけ、特製バジプレゼント500円募金で資金を集めました。元町公園や函館山や港など地域資源を活用したイベントを用意した。函館山山頂から自分の住む街に向かうスキー滑降や、冬の函館港内のウインドサーフィン、元町公園に設置したステージコンサートや、飲食屋台などに多くの人が集まりました。祭も終了し、やがて次なる高みを目指すべく「元町倶楽部」へと変身します。

ユニオンスクエア明治館内にオシャレなカフェバー・シャノワールがありました。奥に大きな木製丸テーブルがあって、そこが我々の集会所でした。面白い話はいつもこのテーブルのビールジョッキから生まれ、「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」もここで誕生しました。「下見板張り」など、この辺りの木造建物にはペンキが塗られています。ペンキは表面の色しか見えないが、50年100年の年月の間に幾度か塗り替えたはず、それをサ

ンドペーパーで擦れば色が層になって現出する。我々はサンドペーパーと梯子を携え街に繰り出した。”時代の可視化”であり、”函館の過去に入り込む窓”を探し使命感に燃えた。そんな我々の色彩研究班は「第5回トヨタ財団研究コンクール」の最高賞に選ばれて研究助成金500万円と、さらに2千万円のフォローアップ助成金が授与された。それを原資にして街づくりを目的にした「公益信託・はこだてからトラスト」を設立し、記念してトヨタ財団のプログラムオフィサー山岡さんの講演会を催した。山岡さんは人々を企業人と市民と役人とに分類する。企業人は過去や未来に無頓着で、現在利益の最大化を目指し行動する。その対極にいるのが市民で、逆に過去や未来に執着する。つまり記憶と希望が行動様式なのだ。両者は対立構造にあるのだ。そして両者の中間に行政が存在する。法律を制定したりして異なる両者の言い分を調整し平和的共存を図るのだが、しかし今の行政はどこか企業寄りだから市民はもっと頑張ろうね！と語っていた。

バブル東京マネーが押し寄せ、景観条例施行の間隙を縫って函館山麓一帯にリゾートマンションが幾つも計画された。そこで景観条例の応援団「高層建築を考える会」が立ち上がった。反対署名を集めて市長や市議会、マンション会社へ届けに行くわけだ。その一方で、市長も参加した市民集会が開かれた。さまざまな反対意見が飛び交ったが会場から一人の女性が子供の手を引っ張って立ち上がり発言した。「私は西部地区が大好きです。年に何回も訪れますが、しかしそのまま放っていたら変わるでしょう。子供達が大きくなり、あの時お母さんはどうしてたの？と言われてたくない、だから、今日私はこうして子供を連れてきました」と発言した。

市長も行動し、札幌支店を訪ねて善処を要請した。そして市民グループも東京本社へ署名簿を渡すべく出掛けた。企業だって対応に抜かりはなく、貫禄十分の担当者は「お気持ちはわかりますが、法の下での正当なる経済活動とご理解いただきたく…」と応じる。その言葉は重みと説得力があり、返す言葉が無くなる。だが、そのとき成り行きを静かに見守っていたヨハネ教会のハンセン牧師が立ち上がり「トーニカク、神ガ許シマセーン」と一言。この御言葉が効果発揮したらしく、結局このマンション計画は取り止めとなった。こうして活性化路線の一角が崩れたが、近代ヨーロッパの進歩主義や合理主義を無批判的に受け入れたのが問題発生の原因だったかもしれない。

～ 西部地区の魅力と持続 ～

そこで英国を訪ねるとにした。産業革命発祥地の現状

がとても気になるではないか。“ナショナルトラスト”と“グランドワークトラスト”そして“シビクトラスト”の三つを訪ねた。

“ナショナルトラスト”は「良きものを徹底して残す、人類が次の氷河期を迎える迄あるがまま残す」が基本姿勢だ。ただ、全てをフォローするわけじゃなくて「国宝級」が主らしい。“グランドワークトラスト”は「産業活動で汚染された環境を元に戻す活動」が主だ。各分野の専門家や学者を抱え、幾つかの復元プロジェクトを展開していた。“シビクトラスト”は地域や都市単位に独立して存在する。「ローカルプライド」がキーワードで、長い歴史の中で形成された地域の誇りの発見と保存が主目的だ。だから安易に先進地区事例を真似る訳ではない。我々は我々の個性、都市の歴史を持っていると教えられた。デベロッパーの開発行為にあたり、まずシビクトラストに計画概要を示し、了解あってから行政が審議する仕組みになっているらしい。

日本の市長は4年毎の選挙で代わる可能性がある。だから目的や志も短期的にならざるを得ない、100年や1000年先の理想像など夢物語となる。そこで景観条例検討委員会で“シビクトラスト構築”を提案したのだが、残念無念にもある大学の若い法学教授に「自分の生徒が答案にそんなこと書いたらペケです」と断言され、結局実現しなかった。良い資源や美しい景観や安全な環境は人間が無意識に壊すと感じた。だが、諦めてはならないのは当然だ。



二十間坂から東本願寺、函館山を臨む

～ エピローグ ～

かって赤瀬川源平さんが「人類の晩年を素直に過ごせ、焼き魚にも大根おろしと醤油をたっぷりかけて…」と書き送ってくれました。池澤夏樹さんの「楽しい終末」が愛読書だし、話題の「アントロポセン」にも1950年以降の地球史人類史の悲観的状况が記されています。だが、私にはまだ若い孫もいるわけで、今少し元気に生き延びる覚悟が必要、そこで最後にお伝えしたいのは「老年も大志を抱こう」です。本日はお招きありがとうございました。

第8回市民公開講座（令和4年3月25日）

坐禅の魅力と作法

曹洞宗 国華山 高龍寺住職 永井 正 人



今般の函館文化会の市民公開講座が当高龍寺で行われたご縁で、村岡武司様の講演の前にお時間をいただき、皆様に坐禅についてご紹介をさせていただきます。

いただきました。

高龍寺の宗派は曹洞宗。一般に「禅宗」とひとくりにされる宗派の一つで、鎌倉時代に道元禅師によって開かれたものです。

一般に、「禅宗」とひとくりにされる宗派（臨済宗、曹洞宗、黄檗宗など）において、修行の根幹は坐禅です。しかしながら、曹洞宗においては日常のすべてが修行ですが、坐禅は特別な修行というわけではありません。また、曹洞宗において坐禅は悟りを得るための手段ではなく、「只管打坐（しかんたざ）」という、目的を設定せずにひたすら坐ることが求められます。坐禅をしている時の仏の姿にこそ悟りが現れると説くのです。

ではどうして坐禅をするのでしょうか。一般的に坐禅というと「ずっと身動きができず辛い」「ちゃんとできないと木の棒で叩かれる」など、苦行のイメージが付きまとい、じっと手を組み、足を組んで辛抱するものと思われていることも多いのが現実です。どうしてそんな辛い思いをするのでしょうか。

いえいえ。永平寺を開いた道元禅師様は「坐禅は、安楽の法門である」と説かれました。「安楽の法門」、無理に現代語に訳すならば、「心も体も楽にしてくれる仏様の教えの実感方法」とでもすればいいのでしょうか。体も心も楽にして、仏様の姿になって坐ることそのものが、坐禅の目的なのです。

ですから本来の意義から言えば、坐禅は無理して痛い思いをして足を組む必要もありません。そこで今回講座に参加された皆様に「椅子坐禅」を体験していただきました。

難しい作法を抜きにして、ただ一つのことだけを心掛けていただきます。それは、「体を真っ直ぐにして坐ること」です。前後にも左右にも傾かず真っ直ぐに坐り、大きく深くゆっくりと息を吐くことを心掛け、空っぽになった肺に次の空気が入ってくる。その繰り返しが椅子

坐禅になります。体験したのはほんの数分の間でしたが、確かにこの瞬間参加者の皆様の姿は「仏さま」になっていました。「きつくないんだね!」「思ったより短いんだね!」帰り際にお声を掛けていただいた一つ一つの感想に、嬉しくなりました。

「正しい坐禅をすると体が真っ直ぐになります。体が真っ直ぐになると心が真っ直ぐになります。心が真っ直ぐになると思うことが真っ直ぐになります。思うことが真っ直ぐになると言うことが真っ直ぐになります。言うことが真っ直ぐになると言うことが真っ直ぐになります。」

この言葉は永平寺七十八世住職であった宮崎奕保禅師様の言葉です。宮崎禅師様は、百八歳で亡くなるまで毎朝、修行僧とともに坐禅をし続けました。

「だから、」と宮崎禅師様は続けます。

「毎朝三分でも五分でもいい。仏壇を前にして、体を真っ直ぐにして、線香を真っ直ぐに立てて、自分の鼻筋と線香とご本尊さまの鼻筋が真っ直ぐになるように坐って下さい。そして、真っ直ぐになった心と体とを活かすこと。そうやって、形は心を作っていくんです。」

村岡先生のお話によって多くの方が函館西部地区のことをますます好きになってくれました。西部地区にあるお寺の住職としては嬉しい限りです。同様に、このご縁によって、坐禅のことを好きになってくれた方が一人でもいらっしゃるのなら、曹洞宗寺院の住職としてこれほど嬉しいことはありません。

高龍寺では、いつでもどなたでも本堂で体験坐禅を行うことができます。みなさん、「坐禅」をしてみませんか？



「椅子坐禅」を実践する永井住職

市電のルーツ・函館馬車鉄道ものがたり

グレイスモデル代表 増井 慎吾



グレイスモデルの増井と申します。元東武鉄道の職員として20年間鉄道の現場に携わったことから鉄道に関係する事が多くありまして、中でも北海道新幹線開業の応援番組としてコーナーを持たせて戴きましたFMいるかの「駅さんのハッピートレイン」に馴染みがあるという方もいらっしゃるかも知れません。今日は函館市電のルーツとなる函館馬車鉄道について解説させていただきますが、江戸時代から明治大正の国内道路事情や陸上交通の発達過程を織り交ぜながら、今の市電に繋がる経緯を馬車鉄道の生みの親であり、湯の川温泉中興の祖でもある佐藤祐知の人物像にも触れながら説明したいと思っております。

○ 幕末から明治期における陸上交通

まず江戸時代の陸上交通についてですが、当時は移動や物を運ぶのに「徒歩」と「人力」が当たり前でした。それが証拠に人が運ぶ荷物は手で持つ担ぐしか方法が無かった訳で、安藤広重の浮世絵で東海道五十三次・江戸日本橋では手に荷物、肩に天秤棒を担いでいる男性が描かれています。同じようにご覧戴いている江戸時代末期に日本へ来た外国人が撮った写真には当時の人足が写っていて三枚目は一目で飛脚だと分かる格好をしているのが良く分かると思います。人を運ぶ手段ですが、これは専ら輿（こし）か駕籠（かご）でしかありませんでした。しかし、駕籠は身分の高い武家が利用する「乗り物」とされていて、庶民が気軽に移動するには使われていません。つまり将軍や大名が乗る「乗り物」ですから庶民

は駕籠に乗る事が禁じられ、ひたすら歩くしか有りませんでした。しかし、江戸の中期になると庶民の生活が豊かになって駕籠に乗ることへの要望が日増しに高まりました。そして延宝三年(1675)遂に幕府が駕籠の使用を容認する事態になりました。この時に登場したのが粗末で四本の竹を柱の四隅を割竹で編んだだけの「辻駕籠」というものです。当時、一里を400文で行けたと言いますから現在の貨幣価値で言うところの約1万円を後払いする今のタクシーの走りとも言える乗り物が庶民の足として明治時代まで活躍します。

○ 馬車と鉄道馬車

馬車が日本で登場したのは江戸末期の大政奉還直後で、時の幕府は馬車利用を認めますが、五街道として山間部の道は険しくて馬車など通れる筈も無く、雨が降れば車輪も埋まる泥道に変わるので一般に浸透しませんでした。それは明治になっても同じようでしたが、その理由については後々の段になってから詳しく説明しようと思っております。

時代は江戸が終わり明治になりました。明治新政府は「富国強兵殖産興業」を旗印に欧米列強に肩を並べるべく鉄道の建設に邁進します。明治5年(1872)に日本で初めて新橋と横浜の間を走る蒸気鉄道が開通すると鉄道開発に火が着きますが、鉄道整備は都市間の移動手段と大型物資輸送の為のものであって市中を簡便に移動する交通手段ではありません。また東京や大阪など主要都市以外では大八車以外に車両は浸透しなかったようです。それと言うのも人以外の動力で車を引く習慣が無かった日本人は明治期に馬車が登場した後も徒歩移動の文化が残り、個人が車両を走らせる為の本格的な都市間道路の整備も遅れに遅れて第二次世界大戦以降へ持ち越されました。明治中期には輸入された乗合馬車と人力車が加わり人の移動は徒歩から乗車へと変化しましたが依然として動力は馬や人でした。人力車は江戸末期に登場した大八車に人を乗せて運ぶ「乗り合い」が前身ですが乗り心地が悪く替わって人力車が登場します。駕籠より早く安く乗れることで急速に普及したことから東京に一万ほど有った駕籠は一気に駆逐され、明治9年(1876)に人力車

の台数が25,000台まで達したほか全国では20万台を超す大成長を遂げます。更に人力車が市中を走りやすいよう道路整備が進められた頃に馬車鉄道が誕生するのです。

馬車の歴史は、映画ベンハーで馬が曳く戦車が登場したようにローマ帝国の時代から有りました。その後、18世紀には車輪付きの荷台を引く馬車とレールに載せて走る鉄道馬車が登場しています。日本では函館でも早い時期に馬車が使われたと記録に有りますが、交通手段として定着しなかったのは大型物資を運搬できる舟運システムが発達していたことや一般的に馬車無用論が根強く存在したことが挙げられます。特に和種馬は調教が難しく馬車牽きには向かなかったことから馬車曳きに対する馬の調教方法が発達しなかったので専ら馬子が荷車を牽いて歩くだけでした。更に道の維持管理についても町や村の責任だった為、轍を作る車輪が嫌われたことも道路を走る馬車の発達には繋がりませんでした。このように馬車は日本には不向きだった交通手段と考えられます。

馬車鉄道は19世紀初めの1803年にイギリスで登場しています。それまで道路を自由に往来できるオープンシステムの道路馬車と違って、レールというクローズドシステムを採用した鉄道馬車は、悪路での乗り心地や物資の損傷をレールで解消できる快適な乗り物となりました。最初は木の板を敷いた路盤に馬車の車輪が逸脱しないように木の板を立てた簡素な作りのものが採用されましたが、そこは木という事も有り馬車の重みに耐えられなかったり雨で水分を含むと路盤が緩んで木が腐るなどして長持ちしない代物でした。しかし、鉄製のレールとそれに載る車輪が開発されるとスピードも上がり路面も安定して乗り心地が改善されると馬車鉄道のレールやインフラを利用して蒸気機関による動力源を用いた鉄道が登場するに至りました。日本で馬車鉄道が登場した経緯ですが、国家事業として鉄道を国の管理下に置く傍ら、蒸気鉄道の重軌道とは別に馬車鉄道などの軽軌道については一般に開放して民間資本をそこへ注入させることを目的に市中往来を安全で簡便に変えられる移動手段として明治政府が馬車鉄道に注目した事がきっかけになっています。そうする事で近代国家の首都として江戸から東京へ面目を一新することが可能と踏んだ新政府の思惑があった訳で、明治15年(1882)に東京で鉄道馬車が走り始めると続いて全国へ普及する事となり、後に北海道では函館、札幌、旭川に馬車鉄道が誕生しています。

○ 函館馬車鉄道と湯の川中興の祖・佐藤祐知

次にいよいよ函館に馬車鉄道を敷いた佐藤祐知に触れますが、明治中期の函館周辺について先ず説明します。

当時、元町や末広町が函館の中心で商圈はそこから広がりましたが、市街地はと言うと地蔵町を抜けて若松に至る方面まででした。そして土方歳三最期の地とされる一本木の辺りと大森浜手前の新川を越えた高森の砂山手前まで人が住める境界線で、その先は笹藪が生い茂る未開の地という酷い有様の原野でした。実際、明治中期の時任町の写真をご覧戴きますが、人が歩けるのは僅かに平らになった場所だけで酷いデコボコ道が広がっている様子が良く分かります。人でさえ歩くのに難儀する道路ですから馬車が行き来するのは至難の業なのは当然です。またその頃に千代が袋を抜けて五稜郭手前で曲がる湯の川までの道が作られましたが、これもまた畑のあぜ道程に慣らした凡そ道と言うに及ばない酷道で、長雨が降れば足が膝まで浸かる泥濘に変わる酷さでした。折角、泉質に恵まれた湯の川村の温泉でしたが、今言ったように道路の不便さから一度二度と訪れていた人も嫌気を覚えた訳で、更に往復となれば湯治気分など吹き飛んでしまうほど疲れる移動を強いられました。当然のことながら湯の川村の温泉宿は暫くして衰退の一途を辿っていきます。また10キロ程しか離れていない函館と湯の川村でしたが交通の不便さから言うと距離的な感覚は今の函館と森の間に匹敵するものだと推測します。そんな最果ての地と考えられていた湯の川村で商売を営んでいた佐藤祐知は復興を目指して先ずは蒸気鉄道を敷いて利便性を高めようと計画しました。



開業当時の湯川に集結する馬車鉄道車両

鉄道免許取得のため請願を始めた佐藤の人物像ですが、独立心旺盛で血の気の多い人力車夫や運送業者の反対にも屈する事無く独力で「バテツ」創設に執念を燃や

す実業家でした。その佐藤は、湯の川村を抜けて根崎の先まで通る蒸気鉄道敷設免許の交付を請願をする為に東京を何度も往復することになりますが、そこで見聞きして乗車した馬車鉄道に佐藤は湯の川村と函館を結ぶ軽軌道の敷設に手応えを感じていくのでした。結局佐藤は蒸気鉄道の免許取得を断念していますが「インターアーバン」とも言える函館と湯の川村を結ぶ都市間交通を目指して馬車鉄道の敷設を決意します。しかしこの頃から猛烈な反対運動が始まります。特に客を奪われると危惧した人力車の車夫が徒党を組んで佐藤を襲う勢いで取り囲んだり、既得権益を守るためなのか函館区の警察署長も反対の側に回ります。それでも信念を曲げず馬車鉄道敷設に挑んだ佐藤は明治30年12月から東川町を皮切りに末広町から弁天に至る山線と濱通りを抜ける海線の市街地2線区から運行を始めています。

その後も順調に路線を延ばした馬車鉄道は、1年後の明治31年12月には念願だった湯の川村までの区間を開通させて今ある市電の路線とほぼ同じ規模まで線路を延ばしました。その最盛期には客車25台、馬97頭、運転手、車掌各33人と馬丁工夫ら各10人という陣容で午前7時半の始発から午後10時の終発までの間、4分から5分おきに200回以上も鉄道馬車を走らせる便利な交通サービスを提供していきました。

大正2年に鉄道馬車から路面電車に役目を渡した佐藤は、大正10年に映画事業に乗り出し湯の川を皮切りに松風町など数カ所の映画館を経営します。そして昭和17年の4月に84歳でこの世を去っています。時は流れて平成10年4月26日には佐藤祐知の偉業を称えて駒場車庫の一角に記念碑が建てられ除幕式が挙行されました。その記念碑を写した写真が今日お渡ししたレジメの表紙に載っているものであります。

○ 馬車から電車へ

こうして函館馬車鉄道は大正2年に電化するまで市民の足として活躍しましたが、馬という生き物特有の事象も重なって運営は苦労続きだったようです。特に生き物が故に食べる飲む排泄するという生理的な問題を克服するために現場は非常に苦労したと言います。先ず馬に必要な食べる飲むですが、馬車鉄道の維持管理より人件費が嵩んだのは当然と言えましたが、それ以上に馬に食べさせる飼料の価格は相当な額でした。今の金額に直すと月に掛かる餌代だけで75万円から80万円、酷い時は100万円に迫る額が飛んでいきました。その数100頭の馬を

一度に養うのですから大変なものです。その他にも線路に落ちる糞尿が悩みの種でボロボロになった枕木を掘り起こして新しい物に交換する様子が写真に撮られていますが、糞尿が染み込むと枕木や鉄製のレールを腐らせるだけではなく、乾燥して馬糞風と呼ばれる強い風が吹けば町中に粉塵となって舞い上がり、その匂いは耐えられるものでは無かったと言います。こうした問題が多く重なり馬車から電車への気運を高めることになりませんが、更に追い打ちを掛けるように不幸が重なったのが明治後期に起きた出来事の数々でした。

先ず日露戦争が勃発すると鉄道馬車を引いていた馬が軍馬として徴用される事態となりました。こうなるとそれまで運行していた便を確保することが難しくなります。更に数年おきに疫病が流行って馬が大量に死亡するなどしましたが、時節柄それを補うにも馬が買えないなどして止むなく運行便数を減らした事も馬車鉄道の終焉を近づける要因となったのです。

こうして不幸が重なった明治後期の時代背景が馬鉄の運命を変えていき遂にその使命を路面電車へ引き渡すことになりませんが、当時大沼で始められていた水力発電で得た余剰電力を路面電車の動力源として利用する事が計画されることになり、函館水電の前身となる渡島水電が函館馬車鉄道を買取りました。こうして経費の掛かる馬から低廉なエネルギーの電気を動力源とする路面電車へ転換することで交通道路事情が向上しながら函館の街も著しい発展を見せるのでした。



駒場車庫前に建てられた「函館馬車鉄道記念碑」

さて終わりの時間が迫りましたのでこれ迄と致しますが、市電のルーツとなる馬車鉄道について皆様が少しでも理解を深められたら幸いです。そして本日はこのような機会を戴きありがとうございました。

「卓話」 ～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎総会後に「卓話」を開催しています。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終え、それで解散も如何なものか、この機会を活用して著名な方々の話を聞きながら、より会員の絆を深めようと始められたもので、そんな趣旨で開催の卓話も今回で17回目を数えました。

今回は、合資会社 水引アート工房清雅舎代表の今泉香織氏を迎えて、函館四天王の一人として知られる初代渡辺熊四郎を主人公に、商いで成功を収め、市民生活の向上や町の発展に尽力する半生を描いた「創作紙芝居『初代わたなべ熊四郎物語』」を昔の紙芝居を彷彿させる語り口とともに、当時の就学困難な児童へ普通教育を施す目的で鶴岡学校を開校し、それが函館文化会へ引き継がれたことなどの貴重なお話しをしていただきました。

なお、卓話でのお話しのポイントを今泉氏にまとめていただきましたのでご紹介します。

第17回卓話 (令和4年5月27日)

創作紙芝居「初代わたなべ熊四郎物語」

合資会社水引アート工房清雅舎 代表 今泉香織



皆さんこんにちは。

ただ今ご紹介にあずかりました、今泉香織でございます。

函館で生まれた^{せきしょう}右巻流水引アート作品の製造、販売を行うのが、合資会社水引アート工房清雅舎です。平成29年度(2017)から市立函館博物館郷土資料館の指定管理者として、同館の管理・運営も行っております。

水引は日本独自の伝統工芸、一方郷土資料館は函館の貴重な文化財、どちらも後世に守り伝えなければならないという共通点を自分の使命と感じ、指定管理者に応募し、受託して今年で6年目となります。

これから上演する創作紙芝居「初代わたなべくましろ物語」は令和2年(2020)が現在の郷土資料館、旧金森洋物店開店140年、そして創業者初代渡辺熊四郎さんの生誕180年という節目の年を記念して制作したもので

す。本日函館文化会の会員の皆様の前で上演できることを誠に光栄に存じます。

また、前編完成の際には、紙芝居の事業に対して函館文化会から助成金を賜り、一層の励みになりましたこと、大変ありがたく改めて御礼申し上げる次第です。

ここで紙芝居の絵を描いて下さった奥村茂樹氏をご紹介します。奥村茂樹さんは道南で活躍されるイラストレーターで、特にペン画の繊細でコミカルなタッチは秀逸です。第32回 函館野外劇のポスターも手掛けられ、現在は生涯教育インストラクターとしても幅広くご活躍されています。

本日スクリーン上映のお手伝いをお願いしております。

それでは早速紙芝居を始めることに致しましょう。紙芝居のはじまり、はじまり～

～紙芝居上演～



紙芝居の一場面

紙芝居如何でしたか？ 続編は熊四郎さんの功績があまりにも多すぎて、12枚に集約するのに苦労しましたが、函館絵本の会「銀のふね」の柄澤昌子氏からさわあつこに紙芝居の文のご指導をいただき、思いの詰まった紙芝居が完成しました。

初代熊四郎さんは天保11年（1840）豊後の国、竹田古町に山下家の長男として生まれました。日本の資本主義の父と呼ばれた、渋沢栄一さんと同じ年のお生まれです。

この時代、長男が他家の養子となることは普通では考えられないのですが、長崎の森屋渡邊家の初代は豊後大分郡森町の出身（因みに森屋の森はこの森町が由来です）、四代目渡邊重吉の実父と熊四郎の父親は懇意にしていたそうです。

想像の域を出ませんが、熊四郎の父親はすでに長崎で活躍していた熊四郎にもっと広い世界を見せてやりたくて、渡邊家の養子になることを承諾したのかもしれませんが。紙芝居を制作するうち、私はどうしても自分の目で熊四郎さんの故郷竹田を見たいという思いが募りました。

では少し故郷竹田のことをご紹介します。

竹田は「たけた」読み、にごりません。豊後竹田のお城は中川氏が治めていた岡藩のお城で「岡城」と呼ばれています。難攻不落、日本最強の山城として知られた名城でしたが、明治に入って残念ながら破却されました。その城跡の様子を歌にしたのが、かの有名な滝廉太郎の「荒城の月」です。

私が驚いたのはその岡城に函館の「臥牛山」と同じ字を当てた「臥牛城」という別名があったことです。その場面を紙芝居にも取り入れています。令和2年（2020）11月に竹田市を訪ね、今も残る城下町の武家屋敷を、熊蔵少年がお父さんの手伝いをしながら走りまわっていたのかと、想像してしまいました。残念ながら西南戦争で戦火にあって、新たな資料を見つけることはできませんでした。

竹田市役所の企画情報課の課長で、まち歩きの達人と呼ばれる方のご案内で、岡城跡へ行きました。標高325m、東西2500m、南北360m、総面積10000㎡という城跡は圧倒的なスケールで、祖母山、阿蘇山、九重連山を見渡せる景色は、絶景でした。故郷では熊四郎さんのことが意外にも知られていないことがわかりましたが、「竹田出身者に函館で活躍した偉人がいたことを誇りに思う」と地元から歓迎を受け、紙芝居を竹田市の図書館に寄贈し、コロナ収束後は交流をしましよと固くお約束

しました。近い将来きっと函館に来て下さることと思います。

くましろうと呼ばれるようになった少年は、お父さんの教育でそろばんが得意になりましたが、寺子屋には半年ほど、しかも午前中のごく短い時間しか通えませんでした。

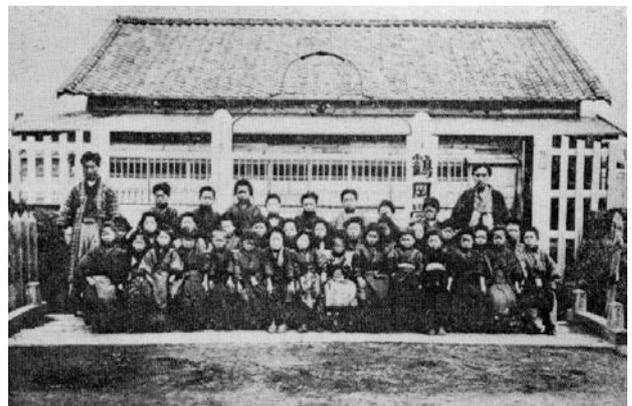
字を覚えたのは丁稚奉公にあがってからです。もちろん商人の子には珍しいことではありません。

しかし、くましろうの凄いところは難しい薬の名前を覚えようと、並々ならぬ努力があったことでしょうか、やがて丁稚時代に頭角を表し、薬種商なので遠い医者のもとへ掛取りに行かされるようになります。そこで医者から聞く様々な話を知識として吸収して、自分のものにしていったということです。しかしながら「無教育のために大きな不自由をした」という思いは心の中に残っていて、それが函館に「鶴岡学校」という窮民学校を建てる原動力となったことは間違いありません。

それは、函館四天王の一人でやはり丁稚奉公を経験した平田文右衛門さんも同じでした。こうして渡邊熊四郎、平田文右衛門をはじめ他の四天王を含む9名が結社を組織し、明治10年（1877）12月7日鶴岡町に「鶴岡学校」が開校します。

現在、鶴岡町の「町名碑」が市役所正面からからまっすぐ海側に向かいますと向かって左PL教団の建物のあたりにあります。当時は貧民が多かった地域だったそうで、高砂町に学校が移転してからも鶴岡の名前を変更することはしなかったと、熊四郎さんは自伝の中で語っています。

旧駅通を利用した開校当初の鶴岡学校の写真が資料の中にあります。学制の改正と共に、鶴岡学校は鶴岡小学校、鶴岡尋常小学校、私立鶴岡尋常小学校社団法人と組織や名称を変えながら貧困児童に対する教育事業を行っていきます。



当初の鶴岡学校（明治11年5月23日撮影）

初代熊四郎さんは明治17年（1884）には私財を投じて新校舎を増築、明治33年（1900）にはご自身の還暦祝いとして高砂町の土地と壹万円という多額の寄付をしています。学校があった高砂町の場所は現在の若松町になっています。社会福祉法人 函館市民生事業協会 函館高砂母子ホームがある場所のあたりです。

大正2年大火で全焼するという不幸に見舞われますが、4カ月ほどで新校舎が完成しています。有志たちの教育に対する情熱が伝わって来る出来事です。昭和4年（1929）社会状況の変化に伴い窮民学校はその役目を終えます。昭和23年（1948）社団法人 鶴岡児友社となり、貧困児童の修学奨励事業を続けますが、昭和40年（1965）に解散。残余財産が函館文化会に引き継がれることになります。この間、初代の跡を次いで二代目熊四郎さんから四代目熊四郎さんまで、さらに準本家の渡邊孝平さんもこの教育事業に関わっていくことになります。

資料として渡邊家の家系図をわかりやすく記しましたので、ご覧下さい。二代目熊四郎さんのことをお話ししておきましょう。

初代熊四郎さんと最初の奥様との間にお子様がいなかったため、跡継ぎとして迎えたのが山下音吉さん。初代の親族ですが、詳しい関係まではわかりません。初代は音吉をその父親に託されて丁稚奉公時代を共にし、長崎の森屋に呼び寄せ、函館にも連れて行って自分の傍らで商売を学ばせます。この本家がやがて金森洋物店、金森森屋百貨店、棒二森屋百貨店を継承していきます。

一方先妻と死別し、後の奥様との間には女の子に恵まれ、長女に婿を迎えて倉庫業と隠居名「孝平」を継承していくことになります。二代目熊四郎の娘婿に迎えた林源三郎が三代目となり、その長男に熊蔵という初代と同じ幼名を与えました。この熊蔵が四代目熊四郎となり、鶴岡児友社の最後の理事長となります。

鶴岡児友社昭和29年の理事4名が四代渡邊熊四郎、鶴岡学校の卒業生宮崎大四郎（宮崎郁雨）、細菌学を修めた医師で函館市長（昭和13年～17年）を務めた齋藤興一郎、初代相馬哲平の孫娘の婿養子となった相馬格郎というそうそうたるメンバーです。

今回文化会の卓話ということで昭和43年（1968）に函館文化会が刊行した阿部たつを氏が書かれた鶴岡学校の沿革史「鶴岡学校」を参考にさせていただきました。この本の中で阿部平三郎会長はこのように書かれています。

「この書を読んで痛切に感じることは、往年における

民間有志の旺盛な公共心とたくましい実行力である。先駆的、開拓的な仕事というものは、国や役所などでは始められるものではなく、民間有志の手によってのみ実行できるものであることは、昔も今も変わらない。～一部略～ 本書は我々に示唆と勇気を与えるものであり、刊行の意義は大きい。」

私もこの書のお蔭で初代から四代にわたる渡邊熊四郎さんと鶴岡学校との関わり、鶴岡学校と函館文化会の関係を詳しく知ることができました。函館文化会は母体の「函館教育協会」から数えて140年を迎えたと伺いました。

今改めてその存在意義の大きさを感じております。函館文化会が歩み続ける限り、教育や文化、公共事業に尽くされた渡邊熊四郎さんをはじめ、あまたの民間有志たちの熱い思いと功績も後世に語り継がれていくものと信じております。

私も微力ながら、郷土資料館という貴重な文化財を通して、函館の歴史や函館を造り上げてきた人々のバイタリティーあふれる姿を、伝え続けてまいりたいと存じます。



市立函館博物館郷土資料館（旧金森洋物店）

また、郷土資料館では土曜、日曜、祝日開館日に紙芝居を上演しています。今後は、学校や児童館などご要望があるところへこちらから出向いて紙芝居を上演することを考えております。郷土資料館1階畳パネル展示スペースでは5月、6月も自主事業の展示を行っている他、毎月荒到夢形さんの講談会も開催しております。水引のしおり作りの体験は常時行っておりますので、今後とも郷土資料館をよろしく願ひ申し上げます。

函館文化会の今後の更なるご発展を祈念申し上げ、本日の私の卓話を結ばさせていただきます。

最後までご清聴ありがとうございました。

特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ ⑦

～ テーマ「西部地区」～

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化」の伝承に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化をテーマに取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史・文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでおります。

第7回を迎える今回のテーマは、“西部地区”。函館山と函館港に囲まれ、函館のまちの誕生と発展を語るときに避けておろすことが出来ない、北海道遺産にも選定されている「西部地区」です。そんな「西部地区」にまつわる話を8人の会員皆さんから投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

また、高校生、大学生が西部地区の魅力を俳句とデザインで表現したポスターで作成した一部をお借りしました。西部地区の魅力が詰まった作品をご覧ください。(31ページ)

なお、次号(第85号)第8回のテーマは“亀田”としました。昭和48年12月、当時の亀田市と合併して来年は50年を迎えます。函館の街の成り立ちにも大きな影響をもたらした「亀田」地域にまつわる、会員皆さんの思い出やエピソード、「亀田」への思いなどをお寄せください。応募の要領等は37ページを参照ください。



函館港から臨む西部地区の街並み



大三坂の洋館

小 熊 庸 介

函館市の西部地区の元町バス停近くに大三坂という坂がある。函館山の麓に並ぶ幾つもの坂のひとつである。山麓の坂道は皆幅が広い。そのため、坂から港を見下ろす景観の良さが、西部地区の街並の風情と相まって、全国の評判を呼んでいる。過去に幾度も街を襲った函館大火の教訓の名残がこの坂道の広さにある。

しかし、この大三坂は幅が狭い。昔からの坂道が拡張されずにそのまま残ったらしい。東西に、東本願寺函館別院のある広々とした二十間坂と、函館西高等学校が正面にある同じく広い八幡坂とに挟まれている、ひっそりとした石畳の細い道である。

バス道路から大三坂を登ると、左側の東本願寺函館別

院を過ぎて右側にカトリック元町教会がある。行く手の国の重要文化財旧函館区公会堂から続く道を横切れば、右手に函館ハリストス正教会、左手に日本聖公会函館聖ヨハネ教会がある。その聖ヨハネ教会の右横を大三坂は更に細くなって続いて行き、そのあたりでチャチャ登りと呼ばれる。「チャチャ」とはアイヌ語由来で、腰を曲げて歩く老翁の意であるという。それほど坂は急になる。

大三坂付近には瀟洒な店などもあって、観光客の多くが通る道である。細くて華奢なのに大三坂という大きな名が付いたのは、昔、坂の入口に「大三」という郷宿(ごうやど)があったからだとの近くの解説板にある。

大三坂の途中、カトリック元町教会の真向かい左手の角地に、武者小路実篤書の「亀井勝一郎生誕の地」と彫った石碑が立っている。その傍らの平らな石には、育ったこの地の特色を記した勝一郎の『東海の小島の思ひ出』

の一節を記したプレートがはまっている。

函館に文芸誌『視線』という同人誌がある。年刊で、同人16人、客員3人が所属する。それまで30年間ほど休刊していた同人誌を平成22年（2010）11月に復刊し、以来、第12号まで発行している。その第7号に、函館ゆかりの文学者を記念した二つの特集が組まれている。「特集Ⅰ 亀井勝一郎没後五十年記念」と「特集Ⅱ 石川啄木来函百十年記念」である。

その「特集Ⅰ」に客員2人が論考を寄せている。そのひとつは、函館文化会神山茂賞選考委員長の安東璋二北海道教育大学名誉教授の『函館のロマンチズム—亀井勝一郎と島崎藤村—』、もうひとつは、詩人で東京在住の麻生直子日本現代詩人協会理事の『亀井勝一郎と中野・荻窪界限』である。

このうちの安東璋二論考は、先に『視線』第3号に掲載された『函館のロマンチズム（一）—北海道文学論争のゆくえなど—』の続編である。この両方の論考にまたがる内容について、安東は、平成24年（2012）10月20日に函館市中央図書館で開催された函館文化会講演会で講演した。その講演記録が『函館の風土と文学～亀井勝一郎をめぐる作家たち～』と題してA5判49ページの冊子にまとめられ、翌年、函館文化会から刊行されている。

一方の、麻生直子論考の文中に次のような一節がある。「亀井勝一郎の名前を知ったのはその頃である。元町の一角にあるメソジスト教会に、少年時代の氏が通ったという話を級友が教えてくれた」

麻生が函館西高等学校3年生の時のことである。その教会とは、バス通りに面して山側にある日本基督教団函館教会である。亀井勝一郎は、大三坂の途中に建つ家に住んでいた。そこから港に向かって降りて行き、左に曲がれば函館教会がある。

近くの函館市西部地区の歴史的景観を代表する国の重要文化財や函館市の伝統的建造物の教会などと比べると、函館教会はメソジストらしく地味で目立たない。元町バス停のすぐ近くにあつて、函館市の景観形成指定建築物ではあるが、市外から来た旅行者の信徒以外は、観光客などが立ち寄ることはほとんどない。

亀井勝一郎の随筆『函館八景』の「四、教会堂の白楊（ポプラ）並木」に次のような一節がある。「私の隣のローマカトリック教会と、その隣のハリストス教会の間は、道路になってるが、私の幼年の思ひ出があるためでもあらうが、山の手のこの静かな道が大好きなのだ。～白楊のあひだから港湾全体を一望のもとに眺めおろすことができる。～ハリストス教会の西隣には、私が少年時代

に通ったメソジスト派の遺愛幼稚園と日曜学校がある。そこを通るとき、ふと洩れてくるオルガンの音をきくことがあるが、さういふとき一挙に自分の幼年の日が思ひ出される」

函館を訪れる多くの人が、この白楊の道を辿って旧函館区公会堂のある元町公園に向かう。ちなみに、この遺愛幼稚園の建物も、ハリストス正教会の復活聖堂、附属門柱や、カトリック元町教会の聖堂、司祭館、附属門柱、附属石塀などと並んで函館市の伝統的建造物に指定されている。

亀井勝一郎の家は、大三坂の山に向かって右側にあつた。カトリック元町教会のすぐ下である。勝一郎の父、函館貯蓄銀行支配人だった喜一郎がこの家を建てたのは、大正10年（1921）のことである。在京の著名な建築家による、当時最先端の洋風建築物だった。この年、2,100戸以上が焼失する大火があつて焼け出され、その自宅跡地に新築したという。勝一郎15歳、弥生小学校を卒業して今の函館中部高等学校、当時の庁立函館中学校3学年に在学していた頃である。

勝一郎の『富める者』の記述によると、彼は自分の上質で目立つ服装と共に、このモダンな邸宅に住むのを秘かに恥じていたフシがある。それを「重荷になってみた」「孤独である」というような言葉で彼は表現している。

かつて、その亀井勝一郎の旧宅に上がったことがある。荒川君という同い年の友人の家だった。

ナナカマドの木が両側に並ぶ傾斜のきつい石畳を登って行くと、旧亀井邸の背の高い洋館の向こうに、もっと高くカトリック元町教会の尖った塔屋が聳えて立つのが重なって見えた。五稜郭界限育ちの目には、それはほとんど異郷の風景だった。荒川君の家は、石塀で囲まれて南側に庭のある、手前の洋館と奥の日本家屋が繋がった大邸宅だった。60年近い昔のことである。

大三坂に面している淡いピンクの壁の洋館は、赤い斜度の急な三角屋根の二階建てだった。半円形の出窓が突き出していて、上にお椀を半分にしたような小さな屋根が付いていた。洋館本体の屋根と同じ色である。窓は1階と2階に3列ずつ並んでいた。白い窓枠で囲まれた、棧で細かく区切られた縦長の窓ガラスが目を引きいた。

1階には暖炉がある広い応接間と、荒川君の使っている洋室があつた。その奥に庭に面した南向きのガラス張りのサンルーム風の大きな部屋があつた。これは家族の居間だった。洋館の2階には3つの部屋があつて、それぞれ妹たちの部屋らしかった。

洋風の建物の向こうに日本家屋が続いていた。幾つも部屋のある古い立派な屋敷だったが、こちらの方は普段あまり用いていないようだった。主人が亀井勝一郎さんを尊敬していて、うちの子供たちをここに住ませたくて手に入れたのですよ、と彼の母親が話していた。



大三坂から洋館とカトリック教会を臨む

麻生直子が西高在学中の昭和33年（1958）あたりは、ちょうど荒川君が住んでいた頃である。坂の上の学校の行き帰りなどに、何度もその前を通ったはずである。

旧亀井邸は、現在、函館市の伝統的建造物驚見家住宅となっている。建物を囲う附属石塀も、共に伝統的建造物に指定されている。その鉄格子の門扉が閉ざされたままの玄関先は、一面にガクアジサイなどが大きく枝を張り出してあたりを覆い尽くしている。建物は静まり返って、人の住まいしている気配はない。



おぐま ようすけ 昭和12年函館市生まれ。北海道学芸大学函館分校卒業。函館市の中学校2校、八雲町の小学校1校に勤務。その後、北海道教育庁日高教育局、胆振教育局、函館市教育委員会に勤務。函館市の小学校校長3校勤務の後、平成10年定年退職。



生まれも育ちも西部地区

山 那 順 一

私は現在87歳。生を受けてから、疎開で1年間離れたほかは、弁天町に住み続けている。此所は函館山の緑と、函館港の海面に、四季を感じずる風光明媚で情緒豊かな場所。お呼びが掛かるまで離れるつもりはない。

御殿山の西にある観音山から、海に下る坂の終わりが、大黒町通りで、一街区を過ぎると市電通りがあり、その次の街区に我家がある。この坂の名は「姿見坂」。坂の上にあった遊郭に因む粋な名前だ。我家の街区に「姿見坂下」という市電の停留所があった。

幼い頃、我家の両隣は新聞社と鉄工場、向いの街区のペリー一会見所跡には銀行があり、市電通りの街区には呉服店、酒・味噌・醤油店、電気店、等の老舗が並び、中には京都の町屋風の店もあった。我家の海側「西部臨港通り」から陸地が終わり、海になるので、道路沿いには、米屋、酒店、船舶用品店、海事関係店が軒を並べていた。その中の重要文化財の“太刀川米穀店”、市の景観形成指定3階建ての“旧提商会”と“今井家旧米穀店”の建物は、現存しており、貸店舗、カフェ、雑貨店として営業している。

私は、昭和19年（1944）小学3年生の時に、石川県大聖寺町（現加賀市）に疎開した。事情があって昭和20年7月に戻った直後の14日、15日に函館空襲に遭遇し、駒止町一帯（元西小・西中学校付近）の爆撃炎上を目撃した。この後に病を得て1年留年したので、全く無駄な疎開だった。中学は船見中学校で、同期生は5学級270人。男子生徒の半数の実家は山背泊で漁業を営んでいて、初夏から秋にかけて、彼らはイカ釣りの為に度々欠席していた。この頃のイカは豊漁で、石川県、新潟県等からも多数の漁船がきていて、弁天町界限には彼等の宿舍も数軒あった。イカを干すイカぶすまが町中に多くあり、雨などで取り込めないことも多く、イカの異臭が街中に漂っていた。

夏の楽しみは、穴澗、ドック沖の赤堤防などで泳ぐより、ウニ、アワビ、赤皿貝などを潜って取って空腹を満たす海水浴。また、石黒組採石場の前浜で、夕風の温かな海水に体を浮かべて、対岸の山並みや海面を茜色に染めて沈む夕陽を眺めるのは、至福の時間であった。

冬は、山上大神宮の上がスロープになっていて、放課後はスキーを楽しんだ。この頃は函館山に積雪も多く、千畳敷でもスキーを楽しむことが出来た。また、西部の

坂を橇で滑るのも、大きな楽しみ。橇は子供達があり合わせの木材と、開き戸の金属のレールを利用して、それぞれ独自の橇を作った。最も人気のある坂は弥生坂。一番上の咬菜園跡から大町電停迄、「去れよ！」と大声で連呼しながら一気に滑り降りるスリルは最高だった。この頃は、偶に坂を横切る馬車とトラックにさえ注意すれば、安全に滑ることが出来た。

昭和27年(1952)に西高校に入学。1年生時の部活は水泳部。プールが無いので、毎日ランニング。御殿山に登り千畳敷を経て、函館八幡宮の階段を兎跳びで2回登る厳しい練習。偶に湯川の大滝温泉・屋外プールで湯中りしながらの泳ぎ。水中練習が希有な水泳部員は、秋の国体予選で惨敗。しかし、この部活で心身を鍛えることが出来たことと、仲間の大野穰(北島三郎)君と、親しい友人として今も交友を深めていることは、私の大きな財産だ。

グラウンドは山側に造成中で、その上にスキーが出来る斜面があった。日本人初の冬季オリンピックメダリスト・猪谷千春選手と父親の六合雄氏が、急斜面を見事な滑りを披露し、全校生徒を感動させた。西高へ登校する時は、初めは八幡坂から昇って行ったが、西高下の白百合高校の女生徒が、窓から口笛を吹いてひやかすので、私と友人は公会堂から船霊神社下を通り登校していた。登校中に通った公会堂は、警察の寮として使われていて、洗濯物など干してある、異様な光景であった。

市役所で最初の勤務先は社会課。私の席の向いには近所の大黒湯の番台に時々座っていたお姉さん。驚いた私は、銭湯は鍛冶町(現在の弥生町)の弥生湯に変えた。私の家の近くに4軒もの銭湯があったが、今は西部地区には大正湯の1軒だけ。この銭湯も8月末で閉店となり西部地区には銭湯は皆無となる。床屋も、以前は基坂から山背泊迄20軒の床屋が盛業していたが、現在は僅かに4軒。時代の変化を痛感している。

昭和54年から3年間商工観光部次長、平成元年から4年間部長として、観光行政を担当した。一番思い出深いのは、石井基子先生に、函館夜景のライトアップ事業と、西部地区の歴史的建造物の個々のライトアップ事業を依頼し、実施出来た事である。その成果は市民の皆様がご承知の通り。この他、函館夜景、西部地区の歴史的な建造物、朝市、イカなどのグルメ等を宣伝する為に、テレビ会社、雑誌社等を歴訪した他、映画関係者等にも様々な人脈を通してお願いして歩き、函館ロケを実現出来たことも思い出だ。ロケハンで来函された監督や映像関係

者は、西部地区は絵になる場所が多く、しかも至近距離に点在しているので、経費の面でも撮影に最も相応しい土地だと、褒めてくれたことも忘れられない。

最も残念な事は、水族館を建設出来なかった事だ。湯川に設置する計画を、緑の島に設置することにして、開発業者何社かと交渉して、最終的に株式会社コクド(西武鉄道の元親会社)に決め、東京は原宿駅前の本社に何度も足を運び、設計図まで出来上がった。しかし、バブルが崩壊し、設置主体の株式会社コクドは、西武グループ都合で解散するなどで、実現に至らなかった。子供達の期待を裏切ることになり慚愧に堪えない。

農水産部長時には、北洋漁業出漁の仕事を担当した。西埠頭には漁船が二重三重と繋がり、出港時には見送りの船員の家族や関係者等で溢れ、紅白のテープが飛び交い、漁船はマストに何枚もの大漁旗を靡かせ、軍歌や演歌を鳴らしながら勇ましく出港する場面は、壮絶の一語に尽きた。

昔から火災の多かったこの地区には、土蔵やレンガや石造りの蔵が、今も多く残っている。

近年、その蔵を改装して、鉄工場、木工場、絵画・写真を展示するギャラリー、音楽会などのイベントホール、さらには、一棟貸しのホテルとして活用する店が多くなった。古民家を改修した一棟貸しのホテル、民宿もあり、人の往来も多くなってきた。

今、西部地区は、大きく変貌を遂げようとしている。工藤市長の「西部地区ビバリーヒルズ構想」の実現を心から願って、この地を愛してやまない男の独り言を終える。



国指定重要文化財「太刀川家住宅店舗」



やまな じゅんいち 昭和10年函館市生まれ。函館市に勤務し、商工観光部長、農水産部長、収入役、助役(現副市長)等を歴任し、平成12年退職。退職後は函館方面交通安全協会会長、函館大学非常勤講師など歴任。現在 交通安全団体顧問、函館シンガポール協会顧問など



西部地区～少年時代の思い出

宮脇寛生

末広町の南部坂下にある生花店が、僕の生家だ。小学2年生まで住んでいた。その後、宝来町へ引っ越し、現在に至る。つまり、ずっと西部地区の住人という事になる。思い出がある西部地区において、特に十字街地区に住んでいた頃の思い出を中心に話を進めてみたい。

僕の記憶の中ではすでに丸井今井は本町へ移転していた。東北以北最古のエレベーターは僕達悪ガキの遊び場だった。デパートだった場所は、鬼ごっこの場になり、よく怒られた。車の交通量が少ない時、道路を挟んで父とキャッチボールをした事は今でも覚えている。生花店は家族経営で、多い時には3世帯で住んでいた。各世帯に子供がおり、忙しい時にはご飯の支度もままならず、子供達だけで外食させられたものだ。記憶を辿ると商店街も元気があって、ご近所付き合いも活発だった。お金を支払わなくても月末払いで対応してくれるお店もあった。子供が5、6人で行ってツケでご飯を食べるのだ。今から考えると生意気な子供達だ。それだけ忙しかったという事だろう。まずは当時の飲食店の思い出を中心に綴ってみたい。

南部坂を少し登ると、現在の元町郵便局隣にラーメン屋があった。「福ちゃんラーメン」と言っていたが、店名は定かではない。カウンターだけの店内で、おばちゃん二人で切り盛りしていた。タバコ屋が隣接していて、よく父に買いに行かされた。味噌ラーメンの味が忘れられない。

一つ隣の坂の途中には「金はいや」があった。階段を上がっていくと待合スペースがあり、そこには鯉が泳いでいた。天ぷらとうなぎが有名で、特にうなぎの美味しさを知ったのは、この店で食べた経験があったからだ。親戚が本州から大勢集まると、この店で宴会が始まったものだ。

創業143年を迎えた「五島軒」。今なお函館を代表する味を守っている。五島軒が展開する店舗の中で、僕がとても思い出深く心に残っているのが十字街店だ。今はスイーツや焼き菓子、レトルトなどを販売しているが、昔は精肉店で、2階にはレストランがあった。そのレストランには家族で良く行ったものだ。本店は風格があり格

式が高く感じたため緊張する。その為、普段着感覚で気楽に入ることが出来る十字街店が大好きだった。何より家族で通った事、若くして亡くなった父との思い出は何物にも代えられない。ポークカツカツに、ライス。ポタージュスープが定番だった。キーアイテムはパセリ。ポークカツカツに添えてあるのはもちろんだが、ポタージュスープにもライスにもパラパラと振られているのだ。これが何とも言えない特別感を感じた。父はライスにもパセリにも塩をかけて食べていた。マネをしたくなるのが子供心である。あのパセリの苦味で、一つ大人の階段を上ったような気がした。

電車通りを宝来町方面へ歩き、横通りを入った所に「元祖インドカレー 小いけ」がある。子供にとって本格的なインドカレーは衝撃的だった。涙が出るような辛さだが、もう一口食べたくなる。汗だくになりながら、水を飲みながら完食する。一子相伝すら叶わなかった小いけのオリジナルカレーは、まさに「汗と涙のカレー」だった。しかし、カレー屋に行ってカツ丼を頼む事も時々あった。他のお客さんが頼んでいるのを見て食べたくなったという記憶がある。それだけ美味しいカツ丼だった。

同じカツでもこちらは「カツ重」。電車通りを更に宝来町電停方面へ進むと、「和風とんかつ専門店 とん悦」がある。とんかつは子供たちみんな大好きなメニュー。ヒレやロースのとんかつ定食など定番メニューがある中で、必ず食べたのが「カツ重」だ。既存のソースかけて食べる家でのとんかつとは違い、少し甘めの特製オリジナルソースがかかっている。これが絶品なのだ。店に行って食べるのはもちろんいいが、当時から今で言うところの【テイクアウト】ができて、大家族の人数分を受け取りに行ったものだ。

ここまで紹介してきた飲食店の中にはすでに無くなってしまったお店もあるが、時代に即しながら伝統を守っているところがあるのは本当に嬉しい限りだ。反面、その伝統を継承する事が難しくなっているのも確かだ。次の世代に期待する事が簡単ではないのも分かっているが、是非頑張ってもらいたい。

西部地区と一言で言っても非常に広い。弥生町や入舟

町方面。青柳町から谷地頭方面。年を重ねて、行動範囲が広がることでまた違うものが見える。高校生まで、そして10年の東京生活を経て帰って来てからも、ずっと西部地区に住んでいる自分の人生を振り返れば、違う時代の、違う視点から見た西部地区の印象もたくさんある。キリが無いので、少年時代の食の思い出話に留めておきたいと思う。昭和40年代後半から50年代前半、少年時代の僕にとっての十字街周辺は本当に元気だった。

特に商店街には活気があった。「むさしや」「きのくにや」「竹田洋品店」「丸山園」「三ッ源」「ちはるや」「ラッキー書店」「栄文堂」「ヤマコ楽器」「石沢スポーツ」「松柏堂」……。今も頑張っているお店から再開で閉めたお店まで、僕の世代が古き良き時代を知っている最後の世代なのかもしれないと自覚する事が最近多くなった。コンビニや大型スーパー時代の中で、商店街が生き残っていくことはとても難しい。しかし、西部地区は函館の宝であり、地域住人の高齢化を考慮すれば、飲食店を含む商店街が元気でいて欲しいと願わずにはいられない。僕自身はこれからも西部地区で生活していこう。

昨今、おぼろげになってきた記憶を喚起するために改めて西部地区の街を歩いてみたいと思う。



十字街を走る市電ハイカラ号（函館市中央図書館蔵）



みやわき ひろお 昭和42年函館市生まれ。駒澤大学在学中からラジオ番組制作に関わり、NHK「ラジオ深夜便」の立ち上げから携わる。平成7年、FMいるか入局。プロデューサー等を経て平成29年4月から局長。



元町、先住民の思い出ポロポロ～

太田 誠 一

「マスターは何処で生まれたんですか？」と旅のお客さんによく聞かれる。必ず僕はこう答える。「実は…」と少しもったいを付け、指を颯爽と上に向けて…「二階です！」と明るくシャウトする。「ここの二階で生まれて、ここの一階で終了する予定なんですよ」皆んなキョトンと驚く。でも、同じ場所で生死を遂げるなんて…今どき贅沢な事だよ、と皆んなシミジミと小さく笑って…珈琲を飲み込む。

思えば、長～い元町暮らしだ。近所のオジさんやオバさんも、だいぶ居なくなった。ヤンチャなガキだった僕が、今や元町のベテランジジーになっちゃった。昔は良いも悪いも、地域コミュニティが濃厚で、ちょいと悪戯したり危ない事をする、と近所の大人達に叱られたり説教されたりした。なんだか、町全体で何となくサリゲナク、子供達を育てていた感じだった。親達も生活を分か

ち合って、町と共生していた様に思う。

街の地形も重要なポイントだ。函館山に向かって縦に18の坂がある。下から、電車通り、バス通りと何段もの横の道があり…交差する。傾斜のある十字路は無意識的に独特なドラマや生活感を育むようだ。

ウチのすぐ横に、大三坂がある。そのクロスロードで教会のシスターとお寺のお坊さんがすれ違う風景があった。何度見ても、子供心にドキドキして奇妙なトキメキを覚えた。ストイックな色気みたいなムードを勝手に夢想したりしていた。変な子供だったのかしらね。本物の大きな教会と寺院が平気で当たり前に同居している絵は…考えてみれば、不思議でタダゴトではない景色だ。こんな街、他にもあるのかなあ～？

小三で学校拒否児童になった。G先生が怖くて、朝に腹痛を起こす。パパちゃんに正露丸を毎日飲まされて昼

前には治る。退屈なので、母が買ってくれた小学館の世界文学全集や伝記本を貪り読んだ。二階の布団の中で知らない世界と戯れていた。弥生小の教生だった美男子のKさん毎日きてくれて…勉強をフォローしてくれた。親が心配して、向かいのお寺のボーイスカウトに僕を入れた。アウトドアを通じて僕は生きる楽しさを覚えた。小四で伊藤とし先生に出会い僕は学校が大好きになった。観音様の様な女性で人の優しさを学んだ。弥生小の屋上でドッジボールしたりスベリオパイプを吹いたりした。屋上からの山と海との距離感が絶妙で…僕達はあの環境で育ったのだと感謝している。

元町には外国の人も普通に居た。特に隣のハム職人カール・レイモンさん。彼も原住民みたいに町に溶け込んで、古い巨木の様に元町の風景になっていた。でかいウィナーの様な太い指で頭を撫でられたりした。僕が30才を過ぎても「オータさんのポーヤさん！オーキクになりましたネ～」とドイツ風の日本語で言ってくれた。声も大きくて太かった。握手が大好きで、強い握力を誉めると嬉しそうに微笑んでいた。ウチの父が癌だと知った彼は、ハムを持って来てくれた。「ワタシのハムは生きた細胞で～す。これで、お父さんの癌は治ります！」とキッパリ言って、心から父を心配してくれた。この頃、父はもう殆ど食べられず…肉は無理だったので、母と僕とで頂いた。メチャクチャ美味しかった。生きた細胞の味がした…。彼は〇〇年ドイツに戻る時、僕にいつもの強烈握手をして「戦争、鉄砲、絶対イケマセーン！」とパワフルに叫んだ。戦争中、スパイ疑惑などで苦悩したのだろう。ヨーロッパ統一の夢を抱き続けた思想家でもあったのだ。自分が選り暮らしした元町を誇り高く愛したレイモンさんは、今の元町や日本や戦争の現実をどう観



大三坂沿いに佇む「やまじょう」と「カールレイモン」

るだろうか？愛犬家の彼が十匹の犬達に引っ張られて夜中に散歩する町の風景が激しく、懐かしい。

さて、僕には変テコな法則がある。自分の過去を顧みると、何故か15年区切りになる。それで、人生1ラウンド15年の5ラウンド説！1Rは元町で産まれて町に育てられ、山や道や広場で友と遊んだ少年時代。2Rは西高から東京、父の病気でやむなく帰函、家業の修行時代。3Rの頭に父が逝き、新しい仲間とイベントやライブやまちづくり活動、映画作りも始まった。熱い恋もした。4Rは店や子供を創り、ロケや映画祭、バル街も始動した。内孫を可愛がってくれた母もちゃんと見送った。5Rもアツという間の後少し。ざっくり約70点の人生。未練は無いが、まだ身体は大丈夫そうなので延長戦の6R目指そうかな～と思ったりしている。

この世界はサブジェクトとオブジェクトで出来ている。つまり主観と客観。外界の事柄や現象に対して考えたり感じたりする働き。意識、自我。独自の立場に立った上での見方、思考が主観。認識作用の対象となる全てのもの、知られるもの、自分の心以外のものは客観である。そういえば、映画作りで脚本を詰めながら、シーンやカット毎に主観と客観を分類していった事もあった。どちらも重要であり、そのバランス加減が難しい。今までは五分五分でやってきた感じだけど、これからは主観を強めに生きようかな～？主観と客観の交差点を意識的に楽しもう…と思います。

文章や伝達表現の心構えは「むやふゆま」つまり「難しい事を易しく、易しい事を深く、深い事を愉快地、愉快的な事を真面目に。終点は「マジメ」なんですネ？実はこの続きがあって「真面目な事を楽しく、楽しい事を控えめに」だそうです。遠いものが近くなったけど、反面、近くの大事なものが遠くなった感の時代が続きます。あと少し…生命が終るまでココ元町で朗らかに生きていこうと想います。気を付けて楽しく行きましょ～♪♪



おおた せいいち 昭和27年函館市元町生まれ。弥生小学校、愛宕中学校、函館西高校を卒業。家業の傍ら、映画祭、元町倶楽部、バル街、黄昏講談会、ロケコーディネーター等イベントやまちづくりに関わる。平成12年、生家を再生して「カフェやまじょう」を開店。野菜作り、キャンプ、競馬、ギター、LIVE企画、お酒等を楽しんで生きている。



弥生小学校旧校舎の思い出

藤井良江

“Oh.,soulful! (オー、ソウルフル!)”ニューヨークのジャズクラブで活躍中のトローンボーン奏者が、弥生小学校の玄関に入られて発した開口一番の言葉だった。「とてもソウルフルだ!この校舎はすごい。」と感激された。函館出身のピアニストで、長年ニューヨークでもう一人ベース奏者とトリオを組んで活躍中の加茂紀子さんが、弥生小学校で児童向けにコンサートを開催してくださるということでのご来校であった。当時の弥生小学校校舎は、築80年のまさに「歴史と伝統の弥生小学校」を象徴する重厚で趣のある建物だった。昭和15年(1940)の新築当時は「白亜の殿堂」と謳われるほど威風堂々とした校舎だったそうだが80年以上経つと当然のことながら、「古くて」「寒くて」「暗い」校舎になってしまっていた。しかし、勤める職員は勿論学ぶ児童たちも弥生校舎を心から愛し誇りに思って生活していたので、「ソウルフル!」と言われて「やっぱり!」と喜んだものだった。地元の方々にも「弥生学校」と創立時から愛され続けてきた。

校舎は、階を上がっても必ず道路に出られるようになっていて、坂道の立地を上手に生かし工夫された4階建ての建物だった。両角がアーチ型になっていて、玄関を入ったところが「地階」で、向かって左側の富岡玄関は児童用、右側の玄関が来校者と職員用。右側を入ると靴箱がありその横に職員用の「脱套室」、用務員室、旧宿直室があり、旧市立図書館弥生分館につながる広い玄関ホールを通過して、これまた広くて緩くカーブのある階段を上っていったところが「一階」である。突き当たりが校長室で、校長室は、小さな教室一個分もある広さで、歴史を感じさせる校長机、応接セット、10人以上が座れる会議机等がゆったり配置されており、窓は勿論上げ下げ式でコブラン織りのモール付きのカーテンが掛けられていた。壁側にどっしり鎮座しているのが昭和初期のアメリカ製の金庫。鍵一つで簡単に開けられる代物ではなく、歴代の校長のみで番号が受け継がれているダイヤル式であった。前校長から手渡された解錠メモの通りに、右に3回、左に6回・・・と順に回していくと最後にガチャッと解錠完了の重い音がし、両手で力を込めて鉄製の扉を開けるとシューという音と共に古の息が漏れ出

てくる。その中には更に桐製の扉があり開けると明治15年(1883)から書き継がれてきた学校沿革誌、著名卒業生の資料等々、たくさんのお宝が眠っていた。勿論、学校沿革誌の明治40年度の頁を繰ると石川一(啄木)や橘智恵子さんが勤務したこともお二人の俸給額も記載されていた。亀井勝一郎が作品の一つに記した「啄木の長女と同じ年に弥生小学校に入学した」ことを証明する入学者名簿も確かに納められていた。

昭和初期には児童数2,000人を数える大学校であったが、次第に減少し、空き教室も増えていき、その空いている3教室を資料室として活用していた。中に入ると歴代の児童が様々な大会で手にした優勝旗、カップの数々、天皇御天覧の絵画や習字、小学生の作品とは思えないその見事なこと!そして大正天皇からの下賜品の書見台や御座布団、亀井勝一郎直筆の習字や成績物、石川啄木の肖像画・・・ここでしかお目にかかれない唯一無二の品々で、その一つ一つをドキドキしながら点検したものだった。また、旧職員だった神山茂氏が奔走され弥生のゆかりの方々から寄贈された絵画や書の数々が、「弥生美術館」と命名された2つの教室と廊下に展示されていた。子どもたちは、岩船修三や池谷虎一、田辺三重松らの絵画等に触れる生活を当たり前のこととして日々暮らしていた。

校舎には「不思議」と「驚き」がたくさんあった。職員室の床板に40cm四方の仕切りがあってそれを引き上げると2畳ほどの大きさのプールが現れ濁りのない綺麗な



同窓生の画家 菅原 靖 作「弥生小学校」

水が満々とたたえられてあったこと。校長室の湿気がひどいので除湿器を置いてみたら毎日1,000mlほどの水が溜まる。1階と呼んではいるが実際は2階なので地面から湿気が上がってくることは考えられない。この水はどこから？と溜まった水を捨てるたびに不思議に思ったこと。真冬の校舎は半端なく寒く、廊下は外気温そのまま。ある時、廊下においたバケツの水を児童が間違えてひっくり返してしまい、雑巾を取りに行き戻るともう凍っていたという嘘みたいなお話も。また、こんなこともあった。校舎は昔風の配線のままで、口の字型の校舎の一線が60m以上あり、角々にある廊下の電灯のスイッチは付けた場所ではか消せない。暗くなってからの見回り時には、角を曲がり次の一線を点検すべく電灯を付けて見回りをするまではよいのだが、次の一線に移る前にまた先ほどの電灯の場所に戻って消灯し真っ暗な廊下をひたすら走る。走る。その60mの長かったこと。

校庭は、斜路を登った上部には春に桜が見事に咲く上段中庭があり、下部はグラウンドとして使用していた。私が赴任する10年位前までは運動会の準備でテントを設営しようとベグを差し込むと、地面の中から「白いもの」が出てきたそうだ。明治13年に校舎を着工する前は、寺町でお寺とお墓が並んでいたことを考えると「白いもの」が埋まっても不思議がないか。そのことを同窓生の方に話したら自分たちが在籍していた頃は弾丸が埋まっていたと教えてくれた。

また、ドラマ等の撮影や取材の多い学校でもあった。あるとき、テレビ局の取材で俳優の萩原流行さん（故人）

が来られた。当初の打合せでは、6年生の国語の啄木授業を参観するだけだったのが、校舎から見上げる牛臥山と周囲のあまりの美しい眺めに感動され、急遽子どもたちに話をする時間がほしいとの申し出があった。そして、「皆さんが学んでいる校舎、函館山の眺め。これは当たり前のことではない。皆さんは本当に素晴らしい環境で学んでいる。自分が大好きな石川啄木もここに勤めて同じ光景を眺めていたことを思えばなおさらのこと。どうか、皆さんは弥生小学校の生徒であることに誇りを持ってください。」と熱く語られた。児童たちは、それまでこの校舎、この環境をごく普通のこととして暮らしていたが、萩原さんのお話を聞いて更に晴れがましく喜びに満ちた顔になったものであった。

3年間という短い期間ではあったが、元町・弥生地区を包むなんとも優しい空気、ゆったりと流れる穏やかな時間……。忘れられない幸せな3年間だった。

離任した後、所用で校舎前を通ることがあるが、旧校舎と意匠を同じくしながらも温かそうで明るくどこもかしこも新しい校舎を目の前にしても、様々な思い出があった旧校舎がダブって見えいつも胸がキュンとなる。



ふじい よしえ 昭和26年岩手県奥州市生まれ。北海道教育大学函館分校卒業後、福島町立福島中、函館市立的中、市内3小学校を経て、市内2小学校に教頭として勤務の後、函館市立北昭和小・弥生小・柏野小・鍛神小の校長を務めて平成24年に退職。その後4年間函館市文学館長を務める。函館文化会理事。



西部地区の歴史資料に感謝とリスペクト ～デジタル資料館を活用して～

仙石 智 義

西部地区は社会人としての原点

私は2004年に公立はこだて未来大学を卒業しました。あれから約18年、函館で社会人になってからというもの、西部地区で行われている様々な活動に関わらせてもらっています。西部地区は、私に気付きや成長の機会を与えるだけでなく、様々な人やコトとのつながりを作ってくれた大切な場所です。心から

感謝しております。

これまで関わってきた西部地区のコトとして挙げられるのは、函館西部地区バル街、函館開港150周年記念イベント、NPOまつり、はこだて国際科学祭、はこだて西部まちづくRe-Designなどです。これらのコトに触れて西部地区への愛着が湧いてくると、その軌跡をたくさん学びたいものですが、私は函館の古地図・古写真か

ら西部地区のコトをたくさん学ばせてもらっています。

デジタル資料の解像度の高さに感動

私が敬仰する星野裕さん（当時の上司）主導のもと、2008年に函館開港150周年記念として「函館古地図・古写真カレンダー2009」を発行しました。カレンダーはA2変形サイズのポスタータイプで4枚組（3ヵ月分が1枚）。明治から昭和初期の函館の街並みを伝えるために「箱館真景（明治15年）」、「函館公園全図（明治15年）」、「吉田初三郎の函館市鳥瞰図（昭和23年）」、「田本研造の函館港写真（明治22年）」の4枚を図版として活用しました。いずれも西部地区との関わりが深い資料ですが、函館市中央図書館に所蔵されている膨大な資料の中から選定したことは、大変ではありましたがとても楽しい思い出です。

これらの資料は、すべてデジタル化されており、無料で閲覧・利用ができることに当時は驚きました。特に、写真師・田本研造が明治22年に函館港を撮影した写真のデジタルデータを拡大したとき、その解像度の高さには衝撃を受けました。函館港で船舶が停泊している様子からは貿易により街が繁栄していたことが容易に想像できましたし、基坂が明治から変わらない大きさを有していたことや、建築物・民家などで構成された美しい西部地区の街並みも確認することができました。また、それらはどんなに拡大しても全く粗くならず・・・明治の函館を子細に切り取っていました。そのため、現代のデジタルカメラで撮影した写真よりも美しいと感じましたので、田本研造の撮影技術力の高さと写真術へかける熱意が伝わってきました。

そして、4年後の2012年にさらに驚く出来事が起こりました！なんと、明治25年に田本研造が撮影した函館港全景のガラス乾板が発見されたのです。しかも田本研造没後100年という記念すべき年に・・・そのタイミングにも驚きましたが、3年後の同じ構図の写真ということもあり、再建工事中だった函館商業学校が完成していたり、魚菜直立所が落成して金森煉瓦造倉庫付近の開発が進んでいたり、解像度の高さだけでなく古写真を比較する奥深さをその時に覚えました。

とぎ時代をめくるカレンダー

2022年は星野裕さんの没後5年であり、写真師・田本研造の没後110年ということもあって、昨年11月に「函館古地図・古写真 複製カレンダー2022」(A4サイズ28ページの冊子タイプ)を発行しました。5年ぶりの発行でし

たので、多方面から「待ってました！」というとても嬉しい声をいただき、おかげさまで約1500部を販売することができました。ご購入いただいた皆様におかれましては、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

カレンダー発行に当たっては、ものかき工房の高山潤さんに制作アドバイスをいただき、ストーリーを構築しました。図版を選定する際、西部地区の資料が多いこと多いこと・・・どの図版も素敵すぎて選定を迷うほどでした。コンセプトは「幕末から戦後までの約100年の時代をめくる」としました。同年代の古写真と古地図(古写真)、あるいは古写真と現代写真を比較して読み解き、資料に盛り込まれている異なる視点の情報をつなぎあわせることで、時代背景や制作者が伝えたかったことを掘り下げて確認できると考えたのです。そのことで、カレンダーを手にとってくれた方々には、新しい発見にとどまらず、函館の未来を考えてもらうきっかけになればという思いを込めました。



函館古地図・古写真 複製カレンダー 2022 (6月・7月・表紙)

カレンダーで活用した図版から2例ご紹介いたします。明治時代の函館は、1000戸以上焼失した大火が6回も発生しており、その度に復興を遂げてきました。田本研造が明治15年に撮影した函館全景では、二十間坂が大火の延焼を防ぐための防火帯として整備されていることが確認できますが、一方で明治9年に撮影された函館全景では、二十間坂の幅は狭いまです。また、明治時代の開拓使は災害に強い街づくりの一環としてレンガ造りの建築を推奨していました。旧金森洋物店はその一つにあたりますが、現在は市立函館博物館郷土資料館として活用されています。これらは、函館市民としてずっと守ってきたい街並みと建築物ですね！

デジタル資料館は、現代を生きる私たちへのメッセージ

函館市中央図書館に所蔵されている歴史資料の多くがデジタル化されており、どなたでも活用することができます。これは、函館市立図書館の初代館長として知られる岡田健蔵の遺志が令和になった今でも引き継がれているからだと考えます。前述した通り、函館は大火の街でした。当時、耐火構造の図書館を作ったからこそ、貴重な資料を大火から守ることができたといえます。そのおかげで現代に生きる私たちは、函館の貴重な歴史資料に触れることができます。人気漫画「ゴールデンカムイ」で描かれている明治の函館の街並みは、このデジタ

ル資料館に収録されている資料を参考に描かれているというから、サブカルファンも驚きですね？！

これからも、先人たちが築き上げてきた函館の歴史を未来に紡いでいくため、多くの方にその魅力を伝え、デジタル資料館を活用していただけるような活動を続けていきたいと考えております。



せんごく ともよし 1982年函館生まれ。2004年公立はこだて未来大学卒業。NPO法人函館市青年サークル協議会 理事長、科学楽しみ隊 副代表、株式会社シンプルウェイ プランナー。



新しく変わろうとしている西部地区

和田 一 明

ご覧いただいた方もおられると思いますが、先日（7月23日放映）NHK・BSの「よみが

える新日本紀行」という番組に出演させていただきました。昭和47年（1975）に放送された北洋漁業母船式船団の出航風景を記録したドキュメンタリー「新日本紀行 船団集結 ～函館～」を新しくデジタル化した映像の後に、当時を振り返って話をする役でした。船団が出港する西浜岸壁のある弁天町に暮らしていたこともあり、取材に快諾インタビューを受けたものです。生まれてこのかた、学生時代などのブランクがあるものの、この西部地区に暮らしていることにあらためて、喜びを感じたものでした。

私の曾祖父が新潟県から15歳で北海道に渡ってきました。函館の親戚をたよって奉公したのち、弁天町で酒類・味噌醤油・雑貨などを商う店を始めたのは明治32年（1899）でした。その後、明治40年（1907）の大火で焼け残っていた土蔵に移って広く商売をすることとなるのですが、それは私が今やっているワインショップ和田商店の現在の建物です。この住宅を兼ねる建物は明治18年（1885）の図録「商工函館の魁（さきがけ）」に載っている約140年前に建てられたものようです。あちこちに傷みが出て修繕維持費などに頭を悩ませています。

子供の頃には、それこそ賑やかな町でした。隙間のないほどに家々が立ち並び、弁天町や西浜町には商社や問屋が、大黒町には色々な商店が店を開いておりました。

この母船式北洋漁業が無くなってからは急激に町並みが寂しくなっていました。

平成16年（2004）に「函館西部地区バル街」が始まります。実行委員のひとりとして当初からこの企画に参加させていただきました。これは、レストラン・バスクの深谷宏治シェフを中心に「スペイン料理フォーラム」というイベントを開催、その時のスペイン文化を知っていただくいくつかの企画のひとつがこれでした。深谷シェフが修行した、スペイン・バスクの主要都市サン・セバスチャンでは数多くのバルBARが軒を並べ、人々は次々とバルを巡り、一皿の料理をつまんで酒を一杯飲み、また次の酒場へと「はしご酒」を楽しむのがこの習慣です。

これを、函館西部地区で始めたのです。最初は雪の降る寒い時期でしたが、25の飲食店が協力してくれました。参加して一緒に廻ったお客様から、これすっごく楽しいとの評判をいただきました。それでは、年2回春と秋にやろうじゃないかとなりました。参加者は、5枚綴りのチケット一冊では足りず数冊を買いバル街まわりをする人もあらわれました。人気参加店の前には空席を待つ長蛇の列、あまりの忙しさに食材が売れ切れ早く終了してしまう店がたり、その後70数店に増えてきた参加店のマップを手に、見知らぬ参加者と情報交換する人、狭い店内で相席して仲良くなった人、観光客だけではなく、地元の人たちにも、バル街は西部地区の新しい魅力を見直すきっかけになりました。この、バル街のしくみ

は全国各地に広がり、新しい町おこしの企画として何百という数の場所で開かれることとなりました。「グッドデザイン賞」や「サントリー地域文化賞」などの評価をいただいております。現在コロナ禍でバル街は令和2年(2020)から行われておりませんが、大勢の人がここ函館西部地区に集まり、楽しいひとときをすごしていただきたいと私はじめ実行委員はその日が来るのを待ち望んでおります。

そして、このバル街の企画は新しい函館西部地区の魅力を引き出すことになりました。というのも、このコロナ禍の最中で飲食店に逆風が吹く中であっても、新しいカフェやブティックが若いチャレンジャーによって続々と開店しているからです。また、魅力ある西部地区の物件を紹介する人たちも活躍されています。西部地区が単に歴史的だけではない観光客に頼らない、何かがある「ところ」になって来たような気がしております。函館文化会の皆様にも、ぜひ新しく変わろうとしている西部地区へと、機会あるごとに足を運んでいただきたいと思っています。



「函館西部地区バル街」を楽しむ市民



わだ かずあき 昭和22年7月1日函館生まれ、北海道大学卒業、昭和53年実家の家業・酒問屋・丸又和田商店を継ぐべく帰函し、その後社長に就任、平成17年函館市本町にワイン専門販売店・ワインショップワダを開業、平成28年に現店舗ワインショップ和田商店(弁天町)に名称変更して移転、現在



西部地区の原点回帰 — 歴史的対話の意味と市民 —

根本直樹

私たちが「西部地区」という言葉を使うようになったのはいつ頃でしょうか。古い新聞には、大正10年の大火後の盛り場の賑いが銀座通りを中部とし、それに対し西部・東部・郊外地という地域認識がありました(大正13年6月15日「函館新聞」)。近代都市の原点における西部です。身近な西部地区は、北海道新聞(以下「道新」)に「西部」の特集記事が生まれ、「函館の山ろく一帯はいつのころからか、西部と呼ばれている」で始まり、「輝かしい歴史を刻んだ西部は今、どう生まれ変わろうとしているの？」(昭和53年6月14日)で前書きが終わっています。近代都市・函館と対峙する新しい西部のもう一つの歴史の原点がここにあるように思われます。

この特集は第五部まで連載されました。その理由は、まぎれもなく近代遺産への関心が高まったことです。契機になったのは、旧北海道支庁函館支庁庁舎の開拓村移

転への反対の投書(昭和52年9月23日「道新」)からでした。函館の歴史性を表象する建物への視線が、「当時庁舎の文化財的意義について意見を交わすムードはなかった」ことへの疑問が一人の主婦から提示されたのです。この動きは、市民運動となり「函館の歴史的風土を守る会」を生むことにもなりました。結果的に旧北海道支庁函館支庁庁舎は移転から方向転換し現地で保存されました。

私は、このような現状にあった数年後の昭和56年に市立函館博物館郷土資料館に勤務します。当時の私は、市民運動に直接的に関係することはありませんでした。しかし『函館市史』で依頼された領域が「都市史」でまちづくりと関連深い内容でした。私が担当した明治期の書評には、「この時期の函館の都市形成を、都市空間の拡大、市街地の機能、都市基盤整備などの諸側面から、多角的に分析した異色の部分である。その最後で、国の拓殖政

策路線から外された函館が、区の公財政と区民・民間資本の協力によって都市整備を進めてきたことを明らかにし、都市形成の主体としての地元商人の先進性を高く評価している。」(平成3年2月19日「道新」夕刊)とあるようにまちづくりの担い手に関心がありました。

歴史叙述で大切な要点は、「歴史の「事実」とされるものは、時代や立場からの解釈によっており、対話や議論を通じて共通の認識となっています」(成田龍一『歴史像を伝える―「歴史叙述」と「歴史実践」』2022)というプロセスが多くの編集会議で実践されたことです。その評価が、「テーマに集中し、詳細でありながら退屈することのない文章でいるどられている。おそらく討論・自己検討・推敲を真摯に重ねた執筆陣たちの日々の緊迫があったにちがいない文章である。(林英夫『地域史はここだ』14 1991)との言葉に表象されていると思います。

私たちが近代都市と歴史的に対峙している仕事と同時に近代遺産との対峙が大きな社会問題になっていました。ひとつは旧北海道支庁函館支庁庁舎を現在地のまま保存するか、敷地内の別の場所にずらすかの選択をめぐっての論議です。移動派は「公会堂の美しい景観を妨げている」とし、反対派は「そのまま保存することこそ意味がある」(昭和54年11月16日「道新」)との見解の違いです。二つめは、元町公園への「四天王像」の設置問題です。要望派は、「四天王像で、昔の自主的な“市民精神”を想起しよう」との考えに反対派は、「経済人の考えを、一般市民に押し付けることになる。」(昭和55年9月12日「道新」)と反対しました。三つめは、復元された国の重要文化財の旧函館区公会堂の貸館の是非の問題です。文化財として建物の保存を優先させ函館市教委が「貸館は一切やめる」との方針と「これまでどおりの利用を希望する」(昭和57年12月12日「道新」)市民サイドとの対立でした。

これは、市民にとって文化財とは何か、また広く文化とは何かを考える格好の生きた材料でもありました。この課題は、「公会堂貸館問題のてん末」のなかで「この問題が投げかけたのは「行政への市民参加」という古くて新しい課題だった。」(昭和58年3月20日「道新」)と担当記者は振り返っています。このことは現在では「市民協働」という言葉に表象されます。市民同士や市民と行政との衝突にみられる共通点は、対話が少なかったこと



元町公園に設置されている「四天王像」

だと推察します。

この時期に記者から、北海道支庁函館支庁庁舎移動問題について「歴史の保存とは何か。その継承とは何なのか。それを考えるうえで本質的な問いをこの論議ははらんでいる。」(昭和54年12月6日「道新」)や、「四天王像」の設置問題では「それぞれの時代に市民は存在し、それぞれの活動をしてきた。その議論の中から、今後の「市民」のあり方を探れるのではないだろうか。」(昭和56年11月19日「道新」)や町並み保存の視点として「市民の側からすれば、地域社会への個人のかかわり方が問い直されるはずだ。」(昭和57年3月7日「道新」)との「問いかけ」が提示されました。

私たちが歴史を学ぶのは、これらの問いに応えるために「(いま)を見る目を鍛え、歴史的な現在としての(いま)を把握する姿勢を培っていくこと」(成田龍一同上)が求められています。それには、重層的な歴史的な対話が大切ですしそのような「場」が西部地区の原点回帰の意味でもあるのです。さらに希望として、新たな文化施設が西部地区に誕生することがこれからのまちづくりにとって有益だと考えます。西部地区が過去を継承する「場」だけでなく新しい文化を発信する「場」をも構想することを期待したいです。そしてその文化施設の担い手が「市民」であることを忘れてはならないと思うのです。



ねもと なおき 昭和29年茨城県生まれ。同56年駒澤大学大学院修了。同年函館市役所に勤務。市立函館博物館、函館市史編さん室に所属。平成12年北海道教育大学函館校に勤務。令和2年3月に退職。現在同校のキャリアセンター相談員。

西部地区の魅力を俳句とポスターで

函館西高校と公立ほこだて未来大学の学生たちが、西部地区の魅力を再発見することを目的に、俳句と視覚要素で構成したポスターをデザインしました。この取り組みは、若者が街づくりに興味を持つことを期待して企画したものです。学生たちは、実際に西部地区を歩き回り、見て感じたことを俳句と視覚要素で表現したもので、若者の視点で感じた西部地区の魅力が詰まっている力作です。作品の一部をお借りしましたので、ご紹介します。



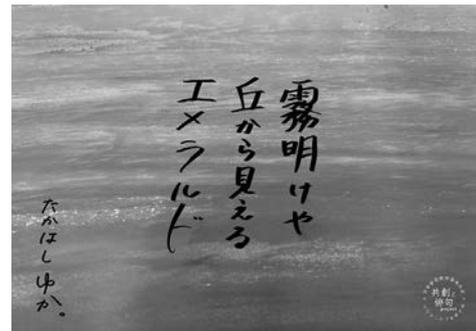
メロンばん じっと見つめる 秋鴉 (西高 小本聖一)



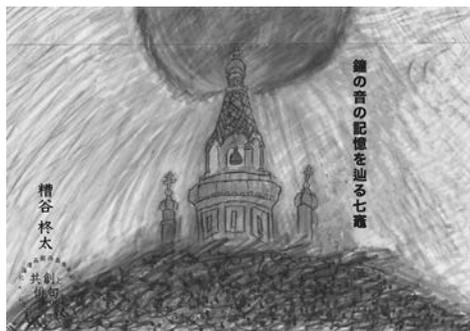
くるくると 枯れ葉がまわる 電車道 (西高 笠原珠季)



銀杏散る サイノールは 動かない (西高 高瀬心)



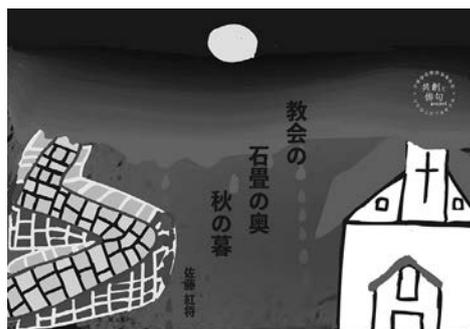
霧明けや 丘から見える エメラルド (未来大 たかはしゆか)



鐘の音の 記憶を辿る 七竈 (西高 糟谷柊太)



赤レンガ 窓際にある クリスマス (西高 花田おーじ茶)



教会の 石畳の奥 秋の暮 (西高 佐藤紅将)



教会の 煙の白い そぞろ寒 (未来大 須藤翼)

特別寄稿

函館でコアップガラナを作るまで

小原 幸男



昭和12年(1938)日中戦争当時、国家総動員法が制定された。それが太平洋戦争に進み、昭和16年には同法50条のうち25条が改正強化された。そうした中で、

17年企業整備令が公布され、商業や消費財部門の中小企業の多くが強制的に整備廃業させられた。

函館に数社あった清涼飲料業者のうち、羽衣サイダーの川守田商店を残して他は皆廃業させられた。その中に高砂通りに面した西川町(現在の大手町)13番地にマルゼン広安商店のサイダー工場があった。当時の西川町や隣接した鶴岡町・真砂町などは大問屋などが多くあり商業都市の中心地であった。

一方、私の父が高砂町(現在の若松町)で米穀と薪炭の小売業を営んでいたが、企業整備で廃業となったので店を改造して、亀田港町で副業で営んでいたワインの瓶詰めを始めた。

太平洋戦争も昭和17年の終わり頃になると、連合軍に制空権を奪われ、ガダルカナル島が危機にさらされた頃のこと、ワインの醸造過程で生じる酒石酸の結晶が電波探知機の部品になると、醸造中の沈殿物に含まれる酒石酸石灰が、戦地での飲料水の浄化に用いられるということで、突然軍部からワインの大増産の命令が下った。

秋になると栽培葡萄は勿論、山葡萄も一粒も食わずに供出せよということで、完熟選果しての醸造どころではない。そんなことで工場の増築増設など大変なことになった。その時ワインの増産にともない瓶詰工場も必要だろうとのことで、西川町にあったマルゼン広安の工場を買い取るようになった。そして昭和20年敗戦を迎えた。手元には粗悪なワインの在庫と工場増築や西川町の工場買収の膨大な借金が残った。

敗戦後の世の中は急速なインフレと闇物資の横行が始まった。そうした中で買う材料は高騰するが、売るワインは酒税の関係で税務署の監督下にあり、マル公価格でより売ることができず苦境が増していった。

そんな中で機械メーカーの指導を受けて昭和24年清涼飲料のラムネやシトロンなどの製造を始めたのである。

この清涼飲料事業は順調に推移したが、昭和28年輸入

の自由化でコーラ飲料がアメリカからはいつてくるということで、この業界が大騒ぎになった。アメリカのコカコーラが来ると日本のこの業界は全滅するというのである。「全滅」と云う言葉には東京空襲や広島原爆などのトラウマがあり、もう生きていけないと皆震え上がった。

そうした中で、全国清涼飲料組合(以下「全清飲」)がブラジル産のガラナを原料とした飲料を開発し、コーラに対抗することにした。ところが、この全清飲の専務理事以下主だった職員が農林省の役員の出で、何を決めるにも年に2回開かれる全国の理事長会議でないと事が進まないのである。当時、北海道の理事長はサッポロ飲料であったが、副理事長をしていたのが函館の羽衣サイダーの川守田氏で、ちよくちよく理事長代理で会議に出ていた。その川守田氏が全清飲の手ぬるさにしびれを切らし、会議でガラナの内容をよく知っていたので、原料商に手を回しいち早く「羽衣ガラナ」を売り出した。

その後、昭和33年ようやく全清飲で「コアップガラナ」の売り出しを決定した。製品の製造は全国フランチャイズ制をとり、北海道は広いので道央・道南・道東の3社が割り当てられた。道南には川守田商店が羽衣ガラナを出しているので小原商店に割り当てられた。北海道の場合、まだコーラが売り出されていなかったがこの黒い飲料が珍しさもあり順調に売れた。

ところが、この飲料には大きな問題があった。炭酸飲料には殺菌力があるというので食品衛生法で殺菌剤の使用が認められていなかった。しかし、ガラナそのものには味が無いのでリンゴ果汁で味付けされていた。それが



西川町の工場(昭和41年)

小売店で数ヶ月売れずに残ったものが発酵腐敗するのである。そして消費者から苦情が殺到した。一時果汁飲料に許可されている殺菌剤を使用したところ、保健所は違法であると摘発し、新聞沙汰になったりして窮地に陥った。当然、当社も新聞に叩かれ、市場の製品の回収をするなどの苦境が続いた。

そんな折、偶々月参りに来た西別院の打本輪番に父がこぼし話をしたら、輪番が「小原さん、それでもガラナは続けたいのでしょうか、それなら」と、木津無庵（大谷派の僧侶）の言葉として次のような話をした。

「やると肚が決まっているのなら、何が起ころうと心配せずに工夫することだ。いかなる名医といえども、自分の子供が重体に陥ったときには脈をとる手が乱れる。それは血のつながりから来る不安が断ち切れぬからだ。しかし、他人の医者だったら、そういう心配はなくて工夫するだけだから立派に脈もとれ病気も治せるのだ。だから、事を処する場合は『心配するな、工夫せよ』という境地が大事なのだ。」ということだった。

当時、熱交換式瞬間殺菌機が開発されていたが、高価なもので中小企業では買えるものではなかったが、何とか工面してそれを購入することにした。多くの同業者が撤退していく中で当社は順調に生き抜くことができ、北海道全域に販路を得ることが出来た。

高砂通りは市の中心部を貫く幹線道路であり車の交通量はかなり多かった。朝の時間帯には配達用の車の他、道内向けに積出すトラックや資材を積んだトラックが入って来るなどで会社の前では車が大渋滞し、鶴岡交番から注意を受けたこともあった。そんな中、弁天方面で火事があり市役所前の消防本部を出た消防車が当社の手前で道を右折し、電車通りに出て行った。後で「小原、あの混雑を何とかしろ」とお目玉を食ったこともあった。



おばら ゆきお 昭和4年函館市生まれ。(株)小原に入社し、取締役専務理事、代表取締役社長、平成8年から取締役会長に就任。函館青年会議所理事長、函館ロータリークラブ会長など歴任

特別寄稿

野鳥の世界に魅せられて

西澤勝郎



私は、現在日本野鳥の会道南松山という自然保護団体に所属して、年20回の探鳥会（例会）の企画、広報、実施、記録（会報掲載する原稿と資料の整理）

を担当している。

私が、野鳥に興味を持ったのは、今住んでいる場所に住み始めてからで、現在は、大きなショッピングモールになっているが、当時は、家の傍に畑が広がり春になるとヒバリが飛び交いキジが姿を見せてくれ、松倉川にはオオヨシキリが渡って来て子育てをしていた。

その後、カッコウも来てオオヨシキリに托卵（自らの卵と、それから生まれる子の世話を他の鳥に託す行為）するチャンスをうかがっている様子等を観察することが出来た。

これは、今でも続いている。このような光景がごく当たり前と思っていたが、平成15年（2003）頃にバンダー

（渡り鳥の標識調査員）の資格をもっている現役時代の先輩に会い、鳥のことを教えていただいていると「バードウォッチングをしている会があるから」と例会に誘われ妻と参加をした。（当時は道南松山支部）

何度か参加して鳥のことをより興味を持ち始めた頃の平成17年（2005年）の7月上旬、仕事を終え帰宅し妻とオオヨシキリの子育てを観察していると、川辺を散歩していたご夫婦が松倉川と湯の川の合流点で、首の長い、羽の色が見たことがない大きな鳥が2羽いましたよ」と教えてくれた。急ぎ合流点へ行くと、少し冠水した中州に、頭部から背にかけてははっきりとした茶褐色、くちばしが黒く、胸は赤褐色、羽に細かい白線があり、脚はオレンジ色をした大型のガンの一種と思われる2羽が、カルガモの傍で草を盛んに食べ、水の中にくちばしを立てて何かを探っていた。ゆっくり中州を歩いている姿に見られているうちに、陽が落ち始めてきたので、慌ててカメ

ラを取り出し何枚かの観察記録を写した。家に戻り図鑑で調べると「サカツラガン」のようだが、自分の持っている図鑑では脚の色が確認出来ないのと、自信がなかったので翌日先輩に電話をして特徴など伝え教を乞うたところ、脚はオレンジ色とのことで「サカツラガン」に間違いないと自信を持った。この1週間後に北海道新聞に五稜郭公園で1羽観察された記事が掲載された。

この出会いと、身近な松倉川でカワセミ等多くの鳥達を観察できることと、我が家から車で40分程のブナの道有林に、春の花を観察しに行った時に出会った国



サカツラガン

の「天然記念物」のクマガラの姿に魅了され、何度も林へ行き会えたことでより鳥を知りたいと思い始め、会の行事にも積極的に参加、前支部長（当時は支部）と前事務局長から例会以外の調査等に誘っていただき指導を受け、更に興味が増したのと指導者に恵まれたことが、現在まで鳥達との関わりを持つ大きなきっかけになった。

次に、当会の特色ある探鳥会（例会）、「津軽海峡・海鳥探鳥会」・「七飯町ツバメのねぐら入り探鳥会」・「松前町白神岬バンディング探鳥会」について紹介します。

○ 津軽海峡・海鳥探鳥会（4月）

この探鳥会の目的は、観察する機会が少ない海洋性海鳥を船上から近くで観察することで、なかでもハシボソミズナギドリの渡りを近くで観察できるのは、太平洋上の漁船等の船か、津軽海峡でしかない。そのうえ、津軽海峡を4月中旬から6月上旬にかけて東（恵山）から西（松前）側へ渡って行く時期しか観察出来ない。

観察する方法は函館と大間間のフェリーに乗船して観察する方法（函館と青森間のフェリーでも見ることが出来るが、観察する時間が短いようだ）

ハシボソミズナギドリは、4月中旬に南半球のタスマニア島周辺海域で繁殖を終え、親鳥は体力のついたヒナを残し、自分達だけが北半球に向けて飛び立つ。春季に主要な餌になる動物プランクトンが発生する海上をたどるように北上しています。特に好物であるオキアミ類が表層に大量に出現する海域をたどって渡って来るようだ。

残ったヒナは大人の羽に換羽した後、親鳥の後を追って渡り始め、太平洋を真直ぐ北上し一部は北方四島周辺や

オホーツク海で夏を過ごし、更に北上を続け、ベーリング海や北極海を目指す群れもいる。私達は、恵山岬から津軽海峡に入るごく一部の群れを観察するが、帰りは津軽海峡を通過しない。

9月中旬にはタスマニア島周辺海域に戻るというので、渡りは直線距離で約1万4千キロになり、実際に飛ぶ距離はもっと長くなり往復で2万8千キロを超えらると思われる。南北の両半球で表層に大発生するオキアミ類に合わせて暮らしている。

この例会は、平成16年（2004年）から始まりました。残念なことに令和2年（2020年）から今年までコロナ感染症拡大防止対策のため中止しています。毎回、会員以外の一般参加者が多く、楽しみにしている常連の方もいる。講師には、北海道大学名誉教授が毎回参加して頂き、開会式での講話や、観察中のアドバイスが解りやすく、楽しい説明は皆さんを魅了させてくれる。その年によりませんが、函館港内で浮いているキンクロハジロ等の群れを観察したり、港を出て直ぐにハシボソミズナギドリの群れに会えたり、平成30年（2018）の復路の海峡でハイイロヒレアシシギの1千羽から5千羽程の四つの群れが海面すれすれに飛ぶ姿を見た時には短い時間だったが、なかなか見る機会がないことだけに、参加された皆さんは大感激。

毎回、多くの鳥達に皆さんが出会えるように願って企画しているが、実際に会うまでは不安が付きまとう。（海峡の中程で必ず会えると思っけていても）その年により出航してすぐに群れに会うことが出来たり、大間寄りの海峡でいくつもの筋になって飛ぶ様子を見られたり、船の側や舳先を横切って飛ぶ姿を肉眼で観察出来ることもある。

また、運が良ければアカエリヒレアシシギの群れにハヤブサが何度も攻撃を加え、狩をしている様子やカマイルカ・ネズミイルカとオットセイにも出会える時もあり、また、海に浮いているハシボソミズナギドリを見ることがある。この例会で、これまでオオミズナギドリ・ハイイロミズナギドリ・ミナミオナガミズナギドリ等74種を観察しています。また、初めての方でも森林等の探鳥会と違い鳥達の姿を容易に確認知ることが出来るほか、大間町に着いての2時間余り皆さんは結構有効に使っているようだ。

タクシーや徒歩で大間岬へ行き、マグロ丼等を楽しむ人、近くの食堂で仲間と談笑をして過ごす人、また、近

くの海岸で鳥たちを観察している人と、地元の方と交流して過ごす方もいる。一般の参加者の方に話を聞くと「日常では、鳥達を意識して観察することがないので、この例会で新たに知るものがある新鮮だ」とか「毎回違った海峡の一面を見る機会を得て感激している」等の感想を聴くことが出来た。

毎回、皆さんに楽しんで頂ける例会になるように心がけて開催して行きたいと思っている。



津軽海峡海鳥探鳥会

○ ツバメのねぐら入り探鳥会（8月）

ツバメは、日本と、インドネシアやフィリピンなどの東南アジアを行き来する渡り鳥で、春に東南アジアから日本にやってきて、子育てをし、秋にまた東南アジアへと渡って行く。その移動距離は片道数千キロ、渡りの過酷さや天敵の存在などにより、日本で生まれた子ツバメの内、翌年まで生き残って日本に戻ってくるのは1割程度と言われている。

ツバメが渡りをする理由としては、日本では春と夏にエサとなる昆虫が大発生するため、昆虫の数の変化が少ない東南アジアよりも子育てがしやすいからと言われている。春に日本にやってくると、人家の軒先など、人が出入りする場所に巣作りを始め、あえて人目に触れる場所に巣を作るのは、カラスやヘビなどの外敵からヒナを守るためだといわれている。巣が出来上がると、親鳥は卵を4～6個産み、温め始め、およそ2週間でヒナが生まれる。生まれてから巣立つまで、3週間ほどかかる。

無事に成長し巣立ったヒナは、昼間は巣の近くでエサを食べて、渡りのために体力をつけ、そして、夜になると河川敷のヨシ原などに集まり、「集団ねぐら」をつくる。ツバメの「集団ねぐら」とは、ツバメが夜に集まって眠る場所のことで、ねぐらの規模は場所や時期、天候などの条件によって変わり、数百羽程度の小さいものから、

5万羽、10万羽にもなる大きなねぐらを作ることもある。

ツバメは、ヨシの茎の先端や葉に器用にとまって夜を過ごす。ツバメが「集団ねぐら」をつくる理由は、よくわかっていないが、ツバメを狙うヘビやタカ、カラスなどから身を守るためという説や、エサがたくさんとれる場所の情報交換をするためという説があり、「集団ねぐら」をつくる鳥は、ほかにハクセキレイやムクドリなどがある。

私たちが、毎年観察している大野平野は、新幹線関連施設等の工事のためヨシ原に影響があるのではと心配したが、現在も残っている。ねぐら入り観察の見どころは、日没直前の30分くらいの間に、数百～数千羽ものツバメがねぐらの上空で舞いグルーブ毎にねぐらへと降りて行き、そして完全に日が暮れると、それまでの賑やかさがピタリとおさまり、ツバメたちが眠りにつく。短い時間の中に見られる光景は壮大な迫力がある。ねぐら入りを観察することで、子育てをしている時とは違う、ツバメの新しい一面を観察することが出来る。

日本野鳥の会の「ツバメのねぐらマップ」では日本全国で32か所の観察場所があり、北海道では私たちが観察している1か所だけの貴重な場所となっているのだが、今年の観察会（8月14日）では、ねぐら入りを見る事が出来なかった。ヨシ原の草刈りの状態や大雨によるヨシ原の環境の変化などツバメにとって不都合があって、ねぐらを近くに変えたのではないかと思われる。来年こそこの場所でツバメが安心してねぐらを作ることが出来るよう願ってやまない。

○ 松前町白神岬（天狗山）バンディング探鳥会（9月）

私たちの会には、バンダーという渡り鳥の標識調査員の資格を持つ方が数名おり、その方たちの協力により、秋のバンディング（鳥類標識調査）を実施する日に合わせて例会を開催している。バンディングとは、渡り鳥を待ちかまえて捕獲し、種名が確定した後に金属の足環を装着し、放鳥する作業で、主な目的は放鳥されたこれらの鳥達が他の場所で回収（標識のついた鳥を見つけ、その番号を確認すること）によって、鳥の移動や寿命について知識を得るといふ調査をいう。

場所は、松前町の白神灯台付近の天狗山中腹にある環境省松前・白神2級鳥類観測ステーションで、この周辺は、鳥達が渡りのために、津軽海峡へと飛び出すための集結場所となっている。ここで、捕獲し、調査を終えた

鳥を放鳥する前に、私たちに1羽ずつ種名や羽・体の特徴などと、どこまで渡っているかの詳しい説明を聞くことが出来る。

例えば、オオコノハズクは、虹彩はオレンジ色で、耳の位置が非対称で左右がズレている。また、消音装置をもっている（羽の仕組みについて説明）。足の裏にあるイボイボは掴んだ餌を離さないためにある。威嚇のためか、カチカチと音を出す等の特徴を説明してくれる。



バンダーの説明に耳を傾ける探鳥会参加者

モズは、カエル・バッタ・ドジョウ等の動物質を食べる小さな猛禽類と言われている等毎回興味を引く話があり、楽しみに参加されて質問をしている方が多い。また、調査の方法や使用する道具類やリング（標識の足環）の等の説明もしていただき、学習会を兼ねたこの探鳥会には、鳥に興味のある方が遠方から（東京・札幌など）の参加者がある例会となっている。この貴重な環境がいつまでも残り、鳥達が安心して渡りのルートとして使えるようにと思っている。

○ 終わりに

ここまで私が、会の活動を続けてこられたのは、鳥好きな仲間との情報交換や、教を乞うなどの楽しい時間を共有でき、例会などの鳥見を通して新たな知識を得られることにあり、また、鳥達を取り巻く環境の変化などにも、興味を持ち始めたことにもある。

例えば、平成30年（2018年）9月に起きた北海道胆振東部地震をきっかけに、北海道全域が停電した「ブラックアウト」の教訓から、風力発電所やメガソーラーなどの再生可能エネルギーの利用や施設の新設などが叫ばれ、計画されているが、そのうちの風力発電施設について、風力発電施設のブレードに猛禽類をはじめとした、鳥類が衝突して死亡する事故が生じており、環境省で

は、「鳥類等に関する風力発電施設立地適正化のための手引き」としてとりまとめている。しかし、風力発電施設の立地を検討していく上でバードストライクに関する知見等は十分といえない。私達の会でも計画の段階で事業者に会い立地の変更や、風車の数についても検討を求め、環境影響評価を十分実施するよう話し合いをもっている。絶滅危惧種に分類されるオジロワシの死因については、判明している限り風車へのバードストライクが最も多くなっており、人間にも優しく、鳥達が安全に住んでいける環境の事業であってほしいと思っている。

日ごろ鳥達と接していると、季節になったらこの鳥が渡って来て、姿を見せてくれると思っていたが、年によっては極端に飛来する数が少なかったり、また、姿を見ることがない鳥もある。例えばキレンジャクは、大陸の亜寒帯で繁殖し、冬から春にかけて渡来して市街地へ現れることが多く、飛来数の多い年には、街路樹や公園のナナカマドの実に群がり1日で食べつくす姿が、市



キレンジャク

内のあちこちで見られている。しかし、渡来数は年により著しく変動し、全く見られない年もあるが、これは、函館まで来る前に餌になるナナマカドやイボタノキなどの実が多く採食できる場所があったためなどと思われる。

少し前までは、自分の身近な自然が私達人間の営みにより、無くなって行くことに気が付かないでいたように思うが、そのスピードが加速してきて、野鳥の生息地の消失や里地、里山の衰退などで多くの野鳥が減少していることに気が付いた。

これからは、探鳥会などで今ある自然が人と鳥たちにとって大切な場所であり、守っていかなければことを伝えて行きたい。鳥や自然は私たちの感性を豊かにしてくれると思っており、仲間たちと明るく楽しめる会の運営を長く続けて行きたいと思っている。



にしざわ かつろう 昭和20年函館市生まれ、函館工業高校卒業、昭和39年函館市に奉職し、平成17年都市建設部を最後に定年退職、再就職で青年センター、箱館奉行所に勤務、現在函館市文化団体協議会組織委員長、日本野鳥の会道南檜山例会担当幹事

原稿募集!! 函館の歴史と文化を語り継ぐ・次回のテーマは“亀田”

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に因み、会報で毎号函館の歴史・文化をテーマとして取り上げ、会員皆さんからテーマに沿った思いやエピソードを綴っていただき、後世に残していきたいと考えております。

8回目を迎える次回の特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」のテーマは、“亀田”としました。昭和48年12月、当時の亀田市と合併して来年は50年を迎えます。一面のジャガイモ畑が宅地に変わり、湿地帯だった本通地区には団地開発で整備され、美原地区には商業施設が立ち並ぶなど函館の街の成り立ちにも大きな影響をもたらした「亀田」地域にまつわる、会員皆さんの思い出やエピソード、「亀田」への思いなどをお寄せください。お待ちしております。



函館山から臨む亀田地域の住宅街

【応募規定】

- 1 “亀田” にまつわる思いやエピソード
- 2 文章は原稿用紙6枚程度(2,400字)で、関係する写真1枚の掲載も可能。
なお、原稿には趣旨を損ねない程度に手を加えることがあります。
- 3 原稿は、封書、FAX、メール等で令和5年7月31日(月)までに函館文化会へ送付ください。
- 4 出来れば、これまでに寄稿されていない会員の応募をお願いします。
- 5 原稿の送付先、問い合わせは 函館文化会事務局 TEL・FAX 0138-57-1175

3年ぶりの「市民公開講座」を国華山・高龍寺で開催



椅子坐禅を体験



講座の会場は庫裏



総ケヤキ造りの本堂



荘厳な雰囲気満ちている開山堂

コロナ禍で休講が続いていた「市民公開講座」、3月25日(金)に3年ぶりにギャラリー村岡代表の村岡武司氏を迎え、「西部地区の魅力に惹かれて」と題して曹洞宗国華山 高龍寺で開催しました。講座の前に、高龍寺住職永井正人氏から「椅子坐禅」の紹介、また、講座終了後には、高龍寺の由緒ある建物の本堂や開山堂、山門など解説しながら境内を案内していただきました。(講座の概要は11ページに)



豊かな彫刻が施されている山門

函館文化会への図書等の寄贈

会報「巴響」第83号の発行（令和3年10月）以降、函館文化会に次の図書等の寄贈がありました。

寄贈いただきました皆様に感謝申し上げます。なお、図書等は函館文化会に大切に保存しておりますので、閲覧を希望される方は申し出下さい。

- ・「広報紙『翔たけ』」第29号
（発行 一般財団 小笠原アカデミー教育振興財団）
- ・「函館大学論究 第52輯第2号」 （発行 函館大学）
- ・「宗教文化誌 法華～私と日蓮聖人～」(著者 佐々木 馨)
- ・「あまかい(前・後編)」 (著者 湖村 灯月)
- ・「野又貞夫先生を偲んで」 (発行 学校法人 野又学園)
- ・「会報『温故知新』」 (発行 七飯町郷土史研究会)
- ・「男の中の男・開国の先駆者 榎本武揚の点描」
（著者 根津 静江）
- ・「函館文化会発行 函館開港百年記念絵葉書10枚1組」
（贈呈者 永渕 誠）
- ・「北海道観光50年の軌跡」
（発行 一般財団法人 北海道開発協会）
- ・「処世回想 翔たきの憶い出」 (著者 小笠原 孝)
- ・「支部だより『小さな親切』No81」
（発行「小さな親切」運動函館支部）
- ・「第19回青春海峡文学賞 作品集録」
（発行 北海道文化連盟道南支部文芸専門部）
- ・「函館市民文芸 第61集」 (発行 函館市中央図書館)
- ・「創立45周年記念誌」 (発行 函館朗読奉仕会)
- ・「部誌 kanto 第3号」
（発行 北海道函館西高等学校文芸部）
- ・「広報誌 文団四季 特別号」
（発行 函館市文化団体協議会）
- ・「日刊政経 2022年 夏季特集号」(発行 日刊政経情報社)
- ・日本仏教の近代化と現代の宗教観・生死観
（著者 佐々木 馨）

函館文化会「ホームページ」、「ブログ」の開設

インターネットの普及により、企業・団体等がホームページを持っていることが当たり前になっており、「函館文化会」に対する信頼度を向上していくには、会員を含めたユーザーの求める情報を常に発信していく必要があります。

こうした中で「函館文化会」の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設しております。一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。

アドレスは、次のとおりです。

- ・ホームページ <http://hakodate-bunkakai.com/>
- ・ブ ロ グ <http://blog.livedoor.jp/bunkakai/>



● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けていますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しています。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、FAX、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っています。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

函館文化会事務局からのお願い

※会員皆様の「住所」「電話番号」に変更が生じましたら、事務局に連絡をお願いします。

会務報告

令和3年度 函館文化会 事業報告及び収支決算

5月27日に開催された令和4年度定時総会において、令和3年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見、ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

令和3年度 事業報告

1 郷土史研究者奨励事業を通じ郷土の文化を掲揚し、その振興を図るため、次の事業を実施した

(1) 函館文化会講演会の開催（定款第4条第2号に掲げる事業）

- ・日 時 10月16日（土） 午後1時30分
- ・会 場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
- ・演 題 北洋漁業と函館 ～日魯漁業創業者堤清六氏没後90年にあたって～
- ・講 師 加藤 清郎 氏
（元（株）ニチロ取締役東京支社長）
- ・その他 講演会参加者に「函館市北洋資料館特別入場券」を配布

(2) 第8回「市民公開講座」の開催（定款第4条第2号に掲げる事業）

- ・日 時 3月25日（木） 午後1時30分
- ・会 場 曹洞宗 国華山高龍寺
- ・演 題 西部地区の魅力に惹かれて～元町からみえたもの～
- ・講 師 村岡 武司 氏
（ギャラリー村岡代表、元町倶楽部）

(3) 創立140周年記念 会報で見る函館文化会「この10年」の発行（定款第4条第3号に掲げる事業） 3月31日発行

(4) 会報「巴響」の発行（定款第4条第3号に掲げる事業） 第83号を10月1日発行

2 郷土文化振興のため、文化団体が実施する事業を後援し、或いは助成した

(1) 後援事業（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）

- * 第65回北海道奎星会書道展覧会
北海道奎星会 9月9日～ 9月14日
- * 第46回「小さな親切」作文コンクール
「小さな親切」運動函館支部 12月15日

* 函館朗読紀行

谷村志穂作「大沼ワルツ」朗読会
函館朗読奉仕会 7月22日

* 第97回赤光社公募美術展

赤光社美術協会 10月9日～10月14日

* 高文連第19回青春海峡文学賞

北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部
8月21日

* 「古典の日」朗読会 『源氏物語』朗読会

函館朗読奉仕 11月1日

以 上 6事業

(2) 協賛・助成事業（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）

- * 第65回北海道奎星会書道展覧会
- * 第46回「小さな親切」作文コンクール
- * 函館朗読奉仕会朗読会函館朗読紀行
- * 第97回記念赤光社公募美術展
- * 第19回青春海峡文学賞

以 上 5事業

3 会 議

(1) 総 会

ア 定時総会 5月26日（水）
於：フォーポイントバイシェラトン函館
（議 題）

(ア) 議 案

- * 令和2年度事業報告について 承認
- * 令和2年度収支決算及び監査報告について 承認

(イ) 報 告

- * 令和2年度収支補正予算について 了承
- * 令和3年度事業計画について 了承
- * 令和3年度収支予算について 了承
- * 「講演会」の開催について 了承

(2) 理事会

ア 第1回理事会 5月26日（水）
於：フォーポイントバイシェラトン函館

- (議 題)
- (7) 協議事項
- * 令和3年度定時総会提出議案について 承 認
 - * 神山茂賞選考委員会委員の選任について 承 認
 - * 会員の異動（入会・退会）について 承 認
 - * 事務局長の採用について 承 認
- (イ) 報 告
- * 今後の日程について 了 承
- イ 第2回理事会 9月29日（水）
於：函館大学会議室
(議 題)
- (7) 協議事項
- * 令和3年「神山茂賞」について 承 認
 - * 講演会の開催について 承 認
 - * 会員の異動（入会・退会）について 承 認
- (イ) 報 告
- * 定款第23条第5項の規定に基づく報告について 了 承
(会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告)
 - * 今後の日程について 了 承
- ウ 第3回理事会 3月25日（金）
於：五島軒本店
(議 題)
- (7) 協議事項
- * 令和3年度収支補正予算（案）について 承 認
 - * 令和4年度実施事業（案）について 承 認
 - * 令和4年度収支予算（案）について 承 認
 - * 会員の異動（加入・退会）について 承 認
 - * 「講演会」及び「卓話」について 承 認
- (イ) 報告事項
- * 令和3年度事業実施状況及び収支予算執行状況 了 承
 - * 定款第23条第5項の規定に基づく報告について 了 承
(会長、副会長、常務理事の職務執行状況
- の報告)
- * 任期満了に伴う役員の選任について 了 承
 - * 今後の日程について 了 承
- (3) 諸会議
- ア 神山茂賞選考委員会
- 令和3年度受賞候補者として複数件の推薦があり、7月6日（火）及び9月2日（木）に選考委員会を開催、慎重な審議の結果、今年度の神山茂賞は「該当者なし」と答申した。
- イ 企画委員会
- 函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで10回（持ち回り委員会を含む）で、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。
- ・講演会の講師・演題等の協議及び運営
 - ・市民公開講座の講師・講座名等の協議及び運営
 - ・「卓話」の講師・演題等協議及び運営
 - ・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査
- 4 その他
- (1) 函館文化会ホームページの運営
- 函館文化会の知名度の向上と事業活動推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び開催、報告などの情報インターネットを通じて会員はもとより全国・世界に発信ことを目的に平成29年4月1日に函館文化会ホームページを開設し、運営を行っている。（アドレスは、<http://hakodate-bunkakai.com/>）

● 企画委員会委員交代のお知らせ ●

函館文化会が実施する事業の企画・運営は、5名の委員（理事2名、会員3名）で組織する「企画委員会」が担当しております。この度の役員改選に伴い、次の方々を委嘱いたしました。

藤井 良江、山本 真也、種田 貴司、
根本 直樹、増井 慎吾

令和3年度 函館文化会 収支計算書

(単位：円)

科 目	予算現額	決算額	対予算比	備考
I 事業活動収支の部				
1 事業活動収入				
基本財産運用収入	5,294,000	5,418,700	△ 124,700	
会費収入	296,000	298,000	△ 2,000	
事業収入	28,000	28,500	△ 500	
寄付金収入	1,000	0	1,000	
雑収入	12,000	12,218	△ 218	
事業活動収入計	5,631,000	5,757,418	△ 126,418	
2 事業活動支出				
(1) 事業費支出	3,159,000	3,144,982	14,018	
①文化振興事業	2,494,000	2,480,197	13,803	
事務手当	1,374,000	1,374,000	0	
会議費	142,000	142,379	△ 379	
旅費交通費	104,000	103,960	40	
通信運搬費	93,000	84,861	8,139	
什器備品費	70,000	69,980	20	
消耗品費	64,000	56,339	7,661	
印刷製本費	307,000	303,545	3,455	
委託料	31,000	33,760	△ 2,760	
賃借料	52,000	51,840	160	
諸謝金	95,000	97,822	△ 2,822	
助成金	50,000	50,000	0	
負担金	74,000	73,700	300	
雑費	38,000	38,011	△ 11	
②土地賃貸事業	665,000	664,785	215	
事務手当	225,000	225,000	0	
通信運搬費	5,000	4,666	334	
租税公課	384,000	384,400	△ 400	
委託料	49,000	48,720	280	
雑費	2,000	1,999	1	
(2) 管理費支出	1,709,200	1,723,885	△ 14,685	
事務手当	703,500	703,500	0	
退職手当	200,000	200,000		
会議費	78,100	78,134	△ 34	
旅費交通費	131,100	140,740	△ 9,640	
通信運搬費	95,200	99,112	△ 3,912	
消耗品費	79,600	80,358	△ 758	
印刷製本費	4,000	3,960	40	
委託料	143,000	143,000	0	
賃借料	250,000	250,336	△ 336	
負担金	5,000	5,000	0	
雑費	19,700	19,745	△ 45	

科 目	予算現額	決算額	対予算比	備考
(3) 法人税、住民税及び事業税	481,800	481,800	0	
法人税、住民税及び事業税	481,800	481,800	0	
事業活動支出計	5,350,000	5,350,667	△ 667	
事業活動収支差額	281,000	406,751	△ 125,751	
II 投資活動収支の部				
1 投資活動収入				
特定預金取崩収入	200,000	200,000	0	
退職給与引当金取崩収入	200,000	200,000	0	
特定預金借受収入	100,000	100,000	0	
事業運営調整資金積立金借受収入	100,000	100,000	0	
投資活動収入計	300,000	300,000	0	
2 投資活動支出				
特定預金繰入支出	665,000	665,000	0	
事業運営調整資金積立金繰入支出	600,000	600,000	0	
退職給与引当金繰入支出	65,000	65,000	0	
特定預金返済支出	100,000	100,000	0	
事業運営調整資金積立金返済支出	100,000	100,000	0	
投資活動支出計	765,000	765,000	0	
投資活動収支差額	△ 465,000	△ 465,000	0	
当期収支差額	△ 184,000	△ 58,249	△ 125,751	
前期繰越収支差額	558,000	558,672	△ 672	
次期繰越収支差額	374,000	500,423	△ 126,423	

〈注記事項〉

- ・「予算現額」は、令和3年度第3回理事会（令和3年3月25日）で議決した収支補正予算後の額。
- ・投資活動収支の部 特定預金取崩収入は、次のとおりである。「退職給与引当金取崩収入」は、職員退職支給基準により事務局長の退職金支給のため200,000円を取り崩したものである。
- ・投資活動支出の部 特定預金繰入支出は、次のとおりである。「事業運営調整資金積立金繰入支出」は、将来の事業運営調整資金として600,000円を「事業運営調整資金積立金」に積み立てたものである。「退職給与引当金繰入支出」は、職員退職支給基準により事務員の退職給与65,000円を「退職給与引当金」に繰り入れ積み立てたものである。



